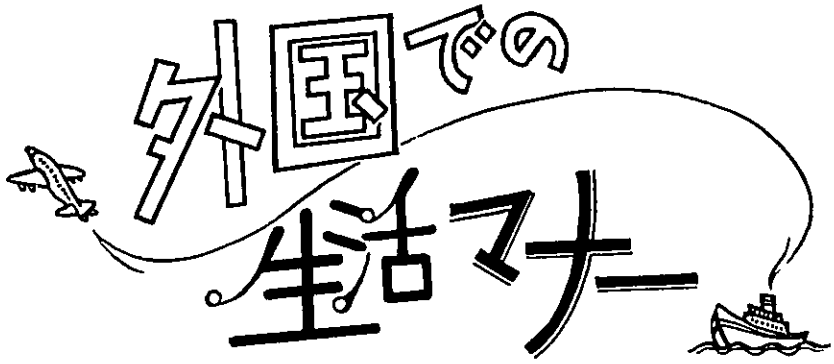

国際協力事業団
海外移住センター

1980. 2

JICA
000
22
BK
LIBRARY

国際協力事業団	
受入月日 '84. 8. 20	000
	22
登録No. 13124	EMC

ま　え　が　き

この小冊子は，当事業団機関誌「海外移住」の昭和49年2月号（320号）から52年12月号（365号）にかけて連載された「外国生活での生活マナー」をまとめて印刷したものである。

執筆者である中島隆三職員（現海外移住センター研修課長）は

『国際感覚というものは自国を他国の立場において物を考えることである。日本的なものの考え方で外国人に接したり，外国を判断してはならない。

世界の大部分は，欧米人によって支配されてきた。したがって国際マナーは，殆んどが欧米人のマナーなのである。

この事実を再認識して，日本人の一人よがりの考え方から脱却することが，国際感覚を身につける早道といえよう』と

述べているが，筆者の長い海外経験から体得した至言といえよう。

JICA LIBRARY
1023543[0]

1980年3月

国際協力事業団
海外移住センター
所長　押　本　直　正

一　目　　次　一

1　自己主張に乏しい日本人 …… 1
2　国際人に他人はない …… 2
3　日本教は海外では通用しない …… 2
4　上向きの姿勢と下向きの姿勢 …… 3
5　自律の習慣と他律の習慣 …… 4
6　不可解な日本人の笑い …… 5
7　個人を強調する習慣と集団に合せる習慣 …… 6
8　せわしい生活と落着いた生活 …… 7
9　お返しを期待する習慣としない習慣 …… 8
10　制服の効用 …… 9
11　日本人を叱ってくれる人 …… 10
12　察しあう考え方 …… 11
13　親切過剰のよしあしを知る …… 12
14　謙遜のよしあしを知る …… 13
15　海外では「出る釘は打たれない」 …… 13
16　郷に入りては郷に従え …… 14
17　カルチャーショック …… 15
18　はっきりした表現とあいまいな表現 …… 16
19　和製英語は英語国でも通用しない …… 17
20　日本人だけでかたまると嫌われる …… 18
21　「和」と「対立」 …… 19
22　外国人にない視線恐怖 …… 20
23　和洋異る財布の紐の管理権 …… 21
24　世界共通の飲酒マナー …… 22
25　国際社会でとるべき姿勢 …… 23
26　お礼は一度だけでよい …… 24
27　ふた通りの「すみません」 …… 26
28　スペイン語からポルトガル語へ発音三十分 …… 27
29　ラテン・アメリカにおける禁語句アレコレ …… 28
30　どうぞ宜敷くお願いします …… 29
31　汝自身を知れ …… 30
32　外国人にない温情主義 …… 30
33　内側と外側のズレ …… 31
34　国際性に乏しい日本 …… 32
35　先駆者たちの努力を無にするな …… 33
36　女性のマナー …… 34
37　年少者教育と人種 …… 35
38　海外での飲酒マナー …… 36
39　外人にいだく劣等感 …… 38
40　スペイン語の発音アレコレ …… 39

1 自己主張に乏しい日本人

われわれ日本人は、西洋人がしゃべりすぎで、おっちょこちょいで高圧的だと思いがちであるが、反対に西洋人は、日本人はあまりしゃべらず、何を考えているのか解らないし、無気味だといっている。日本人のマナーや考え方などが西洋人とはアベコベのものが多いので、とくに海外においては、とかく日本人だけでかたまりやすく、現地人からあまりいい目でみられていない。日本語のうまいジャック・ハルペンは「日本と日本語大論争」のなかで「日本人は社会の固い枠に束縛されて、そこからなかなか脱けだせない。日本人が夜お酒を飲むのはその緊張を解きほぐすために必要だということは僕にも分かる。でも西洋人はお酒を飲まなくても、そういう自由さをもっている人が多い。日本人がお酒を飲んだ時にちょっと西洋人みたいになる」と書いているが、われわれ日本人は外国人とつきあう時には、もっと自分の心を外に表わさなければならないし、もっと自由に話さなくてはならないのであろう。

ある外国人とのパーティーで気付いたことだが、日本人女性はパーティーの会場で知らない男性から何かきかれても冷い態度であしらい、あまり話さない日本人にとっては、おしとやかで女らしくてよいのだが外国人にとっては全くものたりなく退屈してしまうようである。こんな時外国人女性は笑顔をうかべ愛想がよく、バーやキャバレーのホステスと話しているようである。

日本の女性が酒が飲めても、私は飲めませんといってジュースでがまんをしているのが外国人にとって不思議に思われている。もちろん日本では酒や煙草を飲む女性は、よっぽどすれている女として相手にされないしそれで結構なのだが、外国人にとっては逆である。A・ホルバートの「私は日本人になりたい」の中でこういっている。『日本の一般の人がホステスを見ると、ホステスは一見水商売風で、出しゃばり的で、ワイ談にもついてくるし、着るものも素人が地味なものを着るのにくらべ、派手で、ファッショナブルなものを着る。西洋の社会では、これが洗練されたレディだということになる。西洋の上流社会の女性がやっていることは、まさに日本の高級クラブのホステスがやっていることと同じだといってもいい。外国人から期待される女性は、社交的であり、アルコールもほどよく飲めるタイプだ。初対面だからといって、「お酒はダメ。オレンジジュースなら」というタイプは外国ではお呼びでない』といっているが、だからといって外国人に弱い日本女性だからあまり派手に振まって、とりかえしのつかないことを起さないようお願いしたい。なぜなら西洋人の女性は早くからデートに修業しているので日本の女性のようにそうやすやすと騙されずその点自信あるからである。ある外国人がいっていたが男に騙された女性が西洋人であったら、「よくも裏切ったねどうしてくれるの」とせめ、逃げ腰の男をぐいぐい追つめるが、日本の女性はこの場合「私もいい勉強になりました」と泣寝入りになってしまうので外国人にいいカモにされてしまうのである。確かに西洋人に比べて日本人は恥かしがりやで素直に自分の感情を表現できなくなっている。欲しいものを欲しいとはっきり表現できず、又、好きとか嫌いとか単純な感情についても同じであろう。日本人が外国語会話が下手なのも間違った言葉を言わないかとつねにハラハラし、完璧な外国語を話そうとするから結局話す機会を逸してだまりこくっていつまでも会話が進歩しないのであろう。

自己主張に乏しいものは西洋人の眼には、優柔不断なはきはきしないもの、あるいは陰険な人間というように映ることもあるので、海外へ出るものは注意したいものである。

2. 国際人に他人はない

欧米諸国ではエレベーターにのる人はなるべく背をむけないように立つことになっている。つまり隣に背をつけて皆むかい合いである。混んできたらそうもいかないが、奥にいる婦人や先の階でおりるものを出やすくするように立つのがエレベーターのマナーである。

日本人がエレベーターにのる時は、皆出口の方をむいて立っているので、うしろにいるものが先におりる時は押しわけておりねばならない。つまり日本人は自分や自分の同伴者のおりることだけを考え、他人のおりることには眼中にはないということである。またエレベーターのせまいところでは、知らない他人であろうと、お互いに隣人になるのでそっぽをむいたり冷い態度をとらず、なごやかな雰囲気にもっていくのがエチケットである。しかし日本人は他人に対しては冷くそっぽをむく反面、友人や知人などに対しては概して礼儀正しい。他人といえども、いったん知り合いになると、とても愛想がよく親切で礼儀正しいが、相手が全く面識のない他人になると、こんどは無愛想、無遠慮によりエゴをむきだしがちである。

「それでも私は日本人になりたい」の著者ホルバートは、「日本語の中で、私がひどい言葉だと思うのは『関係ないよ』とか『赤の他人』といった言葉である。つまり、日本人は器用に『内と外』を使い分けているのだ。『あれは他人のことよ』と子供に『内』と『外』の違いを教えている母親を見かけたことが何度かある」とのべている。

外国でバスに乗ったりすると、よく知らない同志のおばさんたちが天気の話から身の上相談までやっているのを耳にする。これからみると日本の街はたしかにフレンドリーな街としては知られていないのもむりはない。早い話、他人同志になると、いくら雨が降っても知らない人とタクシーを相乗りするのは日本では滅多に見られないが、外国では毎日やっているとのことである。

最近は釣ブームで釣場も魚よりも人のかずの方が多いとのことである。それも稚魚まで釣り家へ持ちかえって食べるならまだよいが、とってから捨てて帰るものもいる。どうせ捨てるのなら大きく育つまで川へもどしてやれば、また、いつか他人の釣の楽しみにもなるとも思われるが、日本人にはこのような他人に対する配慮に乏しい。外国ではこのようなエゴをむきだしにした釣人をみたことがない。このようなエゴは日本人同志ならまかり通せるかもしれない。

しかし国際間において、他国民を他人扱いにして自国民の利益のみを考えてはエコノミックアニマルといわれるだけでなく、国際的に孤立してしまう。EEC首脳会議で、対日貿易が問題になったとき、イギリスのザ・タイムズ紙に「日本株式会社の計画的犯行云々」とかきたてていたとのことである。日本人は前にのべたように知人、仲間うちでは恥を知り信義を重んじ、思いやりや協調精神が強いが、いったん外にでると「旅の恥はかき捨て」的精神である。この日本人の二重人格を単純に結びつけると、ザ・タイムズが指摘する「日本株式会社の計画的犯行」という日本観が生れるのであろう。

日本人にとって現在もっとも必要なのは、他人に対する思いやり、人の立場になって今一度考え、そして、自分の行動が社会に与える影響を考えてから行動すべきである。国際的に普遍性のある行動をとることが国際化の第一歩であり、とくに海外にでるものが留意せねばならないことであろう。

3. 日本教は海外では通用しない

日本では、あの人はあれだけ人に迷惑をかけておいて「すみません」の一言もいわない奴だとか、「すみません、全く申し訳ない、この通りだ」と頭を深くさげて相手に許しを乞うことにより相手から許され

ることが多いが、西洋人はこの場合は絶対にあやまるということをしないのである。二、三年前だったか、西ドイツに留学した日本人留学生が大学の図書館の本のあるページを切りとったため窃盗罪で起訴され懲役刑を課せられたということであった。日本人だったらこの場合係員に「すみません」とあやまれば、このように大げさに広げなくともすむのであるが、西洋人の場合、「すみません」とあやまったら罪を認めたことになるのでそう簡単には許されない。イザヤ、ベンダサンは、『日本ではこの場合、もしその窃盗の現場を教授なり司書に発見されたらどうなるか。その場合は、「ごめんなさい」「すみません」と謝罪すれば、この行為は不問に付されます。ただもし「ごめんなさい」「すみません」とあやまらなければ、この「あやまらない」ことに対しては、徹底的に追及がなされます。しかし、もしこの際、その教授なり司書なりが、謝罪してもしなくても、窃盗は窃盗だから、その行為は当然法にふれると考えて、謝罪させた上でその生徒を警察に引き渡したなら、今度は逆にその教授もしくは司書が非難され、おそらく「教育者の資格なし」と断定され、免職になるかも知れません』といっており、さらに『ただ以上のことで誤解してはならない点があるとすれば、これは多くの人が誤っているように、日本人の倫理的水準が西欧より低いということではない、ということです。そうでなく、倫理の「基準」が違うのです』とのべ、ベンダサンはこれらのように義理人情、恩、義務、孝、徳などの日本人独特の論理を日本教とよんでおり、日本教以外の世界ではこの論理が通用しないことは説明の必要がないといっている。

（ロッキード事件）

ロッキード事件で全日空がロッキード社に対し、謝罪しなければ航空機の購入を中止する抗議文をロッキード社長宛につきつけたということである。しかし西洋人は謝罪すれば罪を認めたこと、すなわち処罰されねばならないので素直に謝罪する筈がない。一方日本人の考えではこの場合「すみません」とあやまれば購入中止は取消すという意味なのであろう。日本教をよく知っている西洋人だったら、「すみません」というぐらいなら、いくらいっても口はただだから何回でもいうことになろう。それで購入中止が取消されればこんないい教えはないということになる。西洋人が謝罪することは罪を認めたことになるので当然それに対し処罰されねばならないのである。ところが日本人からみれば、全日空の場合の抗議文では日本人同志のように、ただ謝罪すればそれですむという意味にしかうけとれない。西洋人に対してはこの場合「謝罪して当方の申しでた間則を履行したら購入する」というような抗議文を差出さなければ効果がないのではなかろうか。

案の定、数日たってロ社社長から謝罪文が送られてきた。その中で「全日空の経営の名誉を回復するため、あらゆる努力を払うことを約束する」とあり、全日空もこれで誠意を感じ善後策を講ずるといっているが、まんまとロ社の日本教通りにひっかかったものともいえよう。

ベンダサンは、「日本人はいわゆる仏教徒であろうが、キリスト教徒であろうが、すべて日本教の信者であるにすぎない」といっているが、日本人のクリスチャンの実体からヨーロッパのクリスチャンを類推すると、とんでもないことにもなりそうだとはいえる。

要するにわれわれ日本人が、人間はすべて同じという簡単すぎる仮説を信じて外国を眺めるということに、この悲喜劇の原因があるであろう。海外で生活するものは、この点充分に吟味し損をしたり失敗しないよう注意すべきである。

4. 上向きの姿勢と下向きの姿勢

海外にでてとくに気付いたことは日本人の姿勢が悪いということである。日本人は外国人にくらべて姿勢が悪く、海外ではその後姿をみ

ただけで日本人かどうかすぐわかるということである。服装は外国人も日本人もそう違っていないが、背中がいかにも丸い。日本の女性はグンニャリした感じで歩いているが、外国人の女性は背中をピンとはって歩いているからすぐ区別できる。外国人は背筋をまっすぐのばして前方を直視して歩いているのに、日本人は歩道に落ちているものをさがしながら歩いているようである。日本人は疲れを肩のあたりに感じ、よく肩をたたくが欧米人は疲れをふつう首筋に感じているので肩をたたくかわりに右手をうしろにまわして自分の手で首筋をもんでいることが多い。外国人は背筋をのばし体をくねらせるということは滅多にない。日本人は、背中をまるめる。お辞儀がそうだし、人前をよこぎるときなども手を魚のひれみたいに前に出しそ背をまるくして歩く。欧米人にとって、日本人のお辞儀はへりくだりの心の表現と思われている。お辞儀は相手の顔が見えなくなるまで深く頭をさげ、視線のふれあいを絶つというところに礼儀が成立する。欧米人は眼をじっとみることが礼儀にかなったやり方なのに日本人にとっては視線をさけることが礼儀にかなったりする。

会田雄次氏は『日本人の忘れもの』のなかで『白人というのは非常に単純に言えば背骨をまっすぐにしている人種である。バックボーンがあるというのはそういう意味だ。女の人でも物を拾う場合でもけっして背中を丸めて物を拾わない。背骨をまっすぐにして拾う。お辞儀するときでも、コルセットをはめているせいではなくて、なかなか背中をまげない。物を考えるときでも白人は腕を組みそっくり返って考える。日本人は物を考えるときにすぐ頭をかかえたり、お辞儀をするときにうつむいたりする。白人でもロダンの「考える人」と同じようにうつむくこともあるが、あれは絶望したときであろう。彼らが背骨を折ったときはおしまいのときだ』とのべ、姿勢が悪いと精神的健康にも影響し、気分が暗くなり考えがわるくなりその人の将来があやぶまれるのみならず、外国人からみた場合貧弱でみっともないし、日本国民の将来がどうなるのかとあやぶまれてしまう。なぜなら欧米人は姿勢によってその人をみるからである。

会田氏は更にアメリカでは黒人でない黒人を区別するといっている。というのは黒人に対する差別の多いアメリカで、ある黒人がふつう白人しか泊まれないホテルに入ってきたところ、白人のボーイがその黒人のところへとんで行き、実に丁寧にその黒人をテーブルのところへ案内し、すぐ別のボーイがメニューをもってとんできた。そしてその黒人はいかにも落ついて悠然と食事を始めたということである。会田氏はいう『あの黒人は著名人でもお得意様でもない。このホテルは必ずしもそういう意味において評判のいいホテルではないけれども、同じ黒人でも、いわゆる黒人と黒でない黒人と瞬間に区別して黒でなくなった黒人には差別しないというのはその黒人の歩き方、姿勢によるものだ』とのべている。更に『アメリカの白人社会でも下にみられているイタリア人は大きな顔をして歩いている。なぜならアメリカはむやみに博物館が多い国だが、どの博物館へ行っても古いヨーロッパ文化を代表している美術作品はほとんどイタリアのものだ。だから風を切って歩ける』とのことである。

日本製品も世界中いたるところで販売され使われているし、強い地盤を持っている。だからわれわれ日本人も背筋をまっすぐのばし前方を直視して歩くよう心得るべきであり、その姿勢が外国人に尊敬され一もくおかれるのではなかろうか。ロダンの「考える人」と同じように、うつむいたときは絶望したときでおしまいのときだそうだ。メガネとカメラで有名になるだけでなく姿勢のいいことでも日本人とわかるようになりたいものである。

5. 自律の習慣と他律の習慣

筆者の家の近くの横断歩道に新しく信号機が設けられた。他の往来にくらべて交通量の少ないこの交差点の信号機が歩行者にとって最

近わずらわしくなったせいか、信号を無視する歩行者がでてきたので「信号を守りましょう」という立札をたてたり、最近では警官が時々規制にくるようになった。

日本では信号が赤であれば、たとえ車が走っていなくとも渡ることは禁じられている。場合によっては罰金をとられたり、警官に呼びつけられ注意されることもある。しかし海外では信号が赤であっても車が来なければ平気で渡っている。外国では信号機というのは、自動車交通の規則のために発明されたもので、歩行者は安全さえ確認すれば信号に従う必要がないという考えからである。したがって外国では車がとぎれると赤信号でもいっせに歩行者の横断が行われている。「不思議の国ニッポン」の著者ポール・ボネは日本の人は右側、車は左側の規則に対して『車が左側通行を規定するのは当然として、人間がどちら側を歩こうとそれは個人の勝手であって、官憲が指示することはあるまい』とのべ、また『もしも、パリーやニューヨークで赤信号時に横断する歩行者を取り締まったら警官が何万人いても足りない』といっている。更に『私のいいたいのは、人は右、車は左、信号遵守、酒気帯び運転厳禁のいずれをとってみても、日本人とフランス人の物の考え方があまりにも違うということである。日本人を見ると自分で自分を律するよりも、官憲に代表される「他人」が「自分」を律してくれた方が暮らしよいと考えているようにみえる。自分で自分を律することのできない者は社会人として失格者だと見られる』とのべている。なるほど、飲酒運転に対する厳重な取締まりも、恐らく日本だけで外国にはないようである。何故なら外国では運転に支障を来たす程アルコールを飲むものもいないし、自分で自分の飲むアルコールの分量を自分で律しているから、当然飲酒運転の取締まりの警官にみつからなければよいという他人に依存する習慣からぬけきれないのであろう。日本では飲酒運転の事故にアルコールをすすめた運転に関係のないものまでも罰せられる規定があるが、自律的な外国では全くありえないことである。

日本のバスや列車にはどれにもアナウンスがあってうるさい程の親切過剰のサービスぶりである。しかし欧米の列車などの車内にはアナウンスがない。荒木博之はこういっている。『欧米の列車に車内アナウンスが存在しないのは、彼らがつねにみずからの責任において行為することを求められ、また彼ら自身もそれを欲しているという事実によっている。彼らが子供の時に受けたしつけがつねに「ひとりで歩くこと」であったとするならば彼らがみずからの力で旅をし、また歩くことを願っていることはこれまた当然のこととといわねばならない。これに対して、つねに他の律するところに従って動くことを求められ、またそのようにだけ動くように仕向けられた人間は、他の律するところに従って動くという行為がくり返しくり返し行われた結果、歩くことを止めた人間が、ついにはまったく歩行不能な人間になってゆくのと同じように、自力で歩む機能が退化し消滅してゆくことになる』と。

海外へでたら日本式の他人に依存する甘えから脱却し自律性をもって行動しないと、とんでもないことが起るかもしれないので留意したいものである。

6. 不可解な日本人の笑い

アルゼンチンで現地人夫妻をお別れの夕食会に家に招待した時、少し飲みすぎたせいか、相手に贈物をするのに立ちあがったところよろけて転んでしまった。笑いながら立ちあがって、相手夫妻の顔をみたら、なんと笑うどころか真剣そのものの顔をして非者の顔をみつめていた。笑っていた家内も、さすが黙ってしまった。こんな時西洋では転んだ本人も、そこにいあわせたものも日本人のように笑わないのである。海外において西洋人の習慣になれてくると、日本人間の会話でおかしくもないのに、エヘヘヘと歯をむきだしておあいそ笑い、テレ

かくし笑いなどがまことにみにくく見えてくるのである。「すみません」という場合でも、日本人は頭をかいたりニヤニヤしたりするくせがあるが、海外では不真面目にうけとられ却って逆効果を生むこともある。

西洋人が最も気味悪く思うのが、この日本人の笑いである。日本のビジネスマンが商談中、にこやかにほほえんだつもりなのに相手は、何かスキをねらわれたように思い、ギョッとしたという話しがある。冗談をいってもいないのに決してほほ笑んではいけない。またおかしくもないのに笑ってはいけない。日本人は独得の笑い方をするといわれ、西洋人には、日本人の笑いは不可解だというものが多い。特に、日本の女性が口に手を当ててクスクスと笑ったり、面白くもない時に笑うことは、西洋人に誤解されたり疑惑をもたれる場合が多い。日本人の笑いを分析すると、まずテレくさくて笑う笑いがある。特に西洋人に接する場合は、言葉が不自由なせいか、つい笑ってごまかすことが多い。

日本人のスマイルは西洋人にとってギッグル（クスクス笑い）にみえるとのことである。だからふと不快になったり「あいつバカじゃなかろうか」と思われることもあるそうである。すべての日本人がそうだというわけでもないし、むしろ大変に美しいスマイルをもつ人も少くないのだが、イエス、ノーをはっきりいえないところから、日本人のギッグルといわれるのであろう。日本人はたいしておかしくもない低級な冗談ですぐ笑いだす。そのくせ高級な痛烈なジョークのユーモアはなかなか通じない。ユーモアの理解に関しては精神年齢が低いのではないかとある外国人はいっている。

トケイヤーは「日本人は死んだ」の中で、『日本人にとっては非常におもしろい話もわれわれ外人にとってはさっぱりおもしろくもおかしくもなんともないことがしばしばある。日本人の笑いや日本人の浮かべる微笑それからユーモアなどは、何か目に見えないカバーでおおわれているようにわれわれには感じられる。つまり、そのカバーで日本人の心の中の感情をおおい隠している。という意味である。だから日本におけるユーモアというのは、本当の意味の笑いというよりは、一種の「仮面」のようにわれわれには感じ取られる。日本の日常生活においては、日本人たちがお互いに感じている感情を、笑いとか冗談という仮面のもとに隠している』といっている。確かに西洋人は日本人の笑顔が理解できないのであろう。嬉しい時とか、おかしい時の笑顔は当然ながら直ちに解るが、深刻な表情をしてもよさそうな時にも日本人は笑顔を作るのが西洋人にとって不思議なのである。村田英雄がよく歌うある演歌の中に『嬉しかったら腹から笑え、悲しかったら泣けばよい。無理はよそうぜ体に悪い。しゃれたつもりの泣笑い、どうせこの世はそんなとこ』というのがあるが、これから海外に出るものは「テレ隠し」とか「他人に内心の悲しみを見せない徳」のために無理に笑って西洋人の誤解を招ねかないよう心得るべきである。

7. 個人を強調する習慣と集団に合せる習慣

日本語には自己を指示する一人称代名詞が沢山ある。例えば私、僕、俺、自分、あたい、小生など書き並べたらいくらでもある。しかし欧米語では一つしかない。例えば英語のI、フランス語のJEなど。これと同様に相手に対する代名詞も、あなた、君、おたくをはじめ甚だ多い。しかしこれも欧米語では、英語のYOUのようにこれ又一つしかない。もちろん英語以外の言葉などには第二人称といって親しい間柄でつかわれている例えばフランス語のTUなどの代名詞もあるが、日本語程この代名詞の多い言葉は他にない。更に日本語ではこの第二人称を使わずに相手の名前や地位など例えば、誰々さん、先生、社長など第三人称を使って話されることも欧米人に比して極めて多い。

これらのことからいえることは、日本語は、その性別、年令、社会的ステイタス、対話の相手あるいは心の動きなどによって、つねに可変的であり、個性や自我が乏しくつねに他人に依存しているのに対し、欧米人は不変的で恒常的な自我があり、個性が強いということである。日本人の行動様式が集団的であるということは、このように個人が集団に所属して行動するからであろう。

日本と欧米諸国では労働事情が可成り異っており、特に欧米では実力主義、能力主義がつらぬかれ、職務と賃金が結びついた職務給制度であるに対し、日本では、年功序列制度、終身雇用制度であるのもこの集団的な習慣によるものであろうし、集団の論理によって行為することが絶対の条件になる。日本では英語のコンパニーを「会社」というが「会社」を逆にすると「社会」であり、入社することは即ち社会に入るということで、一生その会社のために働くことで個人よりも会社の方が大切で、愛社精神にとみ、サービスが行届くのに対し、欧米人は、入社するのでなくコンパニーに勤めることで、会社のためというより個人の方が大事である。早い話、欧米人には愛社精神は少なく、自分の勤めている会社の悪口など平気でいうし、転職もはげしい。だから職務給制度となるのであろう。

欧米人のサービス精神は日本程ではない。従って欧米ではチップがサービスの報酬となるのであろう。欧米人のチップに対する考えがわれわれ日本人にとってピンとこない。チップなど全く面倒で値段の中に含めたらよいのにと思うかもしれない。しかし欧米人のように自分で自分を守り自分のために働く国においては、チップがサービスの報酬となるのであろう。ストライキも日本のように「団結」と書いたワン章をし、連帯感をモットーとしているのと違って欧米では、「ストライキ」と書いたカンバンをぶらさげてひとりひとりが勝手に歩いているのである。

土居健郎は「甘えの構造」のなかで、「日本人にとって集団はもともと大きな心の支えであり、集団から離反して孤立することはそれこそ全く自分をなくすことであり、それを堪えられないことと感ずるからである。そこで彼らは止むなく一時減却してでも集団に従属する方を選びとろうとする。……この個人対集団の葛藤もその本質は個人の甘えに発していると考えられる」といっている。

さらに「日本人は概して集団行動を好む。集団を超越して単独で行動するということは日本人にとって甚だしく困難である。それは日本人が自分の所属する集団を顧慮しないで単独で行動することを何事によらず裏切り行為と取り、さらにまた単独では恥ずかしいと感ずるためであると考えられるのである」といっている。

日本人の集団主義には、プラスの面もマイナスの面もある。しかし海外ではこのような日本的な考え方を通すことは現地人に対してあまり好ましいことではなく、損をしたり落胆させられることが多い。海外にでるものは、この個人を強調する習慣と集団を主体に考える習慣の根本的な習慣の相違を充分に認識し留意すべきではなかろうか。

8. せわしい生活と落着いた生活

海外旅行に旅立つ日本人団体客一行が羽田空港の待合室で搭乗時刻を待っていた。搭乗の合図があるやいなや、この団体客はどっと入口に押しよせ、ゲートから送迎バス停に向かって一目さんに走りだした。指定席でしかも出発時刻まで充分によゆうがあるのに、どうしてこう走らなければならないのか。羽田空港ならまだよいが、外国の空港でこれをやると、居合わせた現地の人々が面白がる、みっともないのでやめるようにしたいものである。外国では通行人や乗客が走っている姿はあまり見受けられない。又、雨の降る狭い歩道で前方に歩いている人の傘を押して追ぬいていくなどのような光

景も、外国ではめったにみたことがない。外国では通行人が走っていると警官に追われている泥棒と間違えられることもある。ブラジルに移住したある青年が、ずっと前の方に歩いている友人を大声で呼びとめながら走っていくのを現地の通行人が振り返って珍しそうに見ていたこともある。日本にいるある外国人が、日本人はどうしてゆっくりと歩かず、忙しく歩くのかと不思議がった記事を何回となく見たことがある。

外国人には、日本人の身体の動かし方、道路上の歩き方などが、忙しく、急いでいてまるでとんだり、はねたりしているような、ひどく軽く荒っぽいところがとくに彼らに印象づけられているようである。そういえば外国人は一般に落ちついて重く、きちんとしているところに今更ながら気づかざるをえない。

日本人は先へ先へと人を追いぬこうとするせわしさに慣れているせいか、または遅れると損と思うのか、他人にお先にどうぞ、とゆずるマナーが欧米人に比して極めて劣っている。例えば、エレベーターに乗ったり降りたりする時には、外国では他人に「どうぞお先に」というマナーがあるが、これを知らない日本人が外国のエレベーターで日本式に押しわけて乗るのをみた事がある。

日本は狭い国で、そこに一億以上の人間がひしめきあっているのだから、空間に余裕がなく、そのわずかの空間を入手するのに常に人に先んじていなければならないのであろう。レストランで昼食をするにも、早めに行かないと席がなく、並ばなければならないし、遅く行くとうまいものは殆んど売り切れとくるのでどうしても早目に食べにいくようになる。会田雄次氏はいっている。『仕事で競争が好きな日本人は、遊びでも競争する。それはよいとして、それが病的となるとまことに奇妙な現象がおこる。競争のように夏は北海道旅行をする。香港行きが狂気じみた流行になる。そして宿はどこも満員、サービスは悪くなる。物価はあがる。苦労してくたびれに行くだけのことになる。観光業者のカモにもなるというのが今日の日本のレジャーである…。』と。

日本人は常に走っている。走って、ひとに先んじて何んでもやらなければ場所がなくなるのであろう。しかしこれは日本だけであって海外ではそのような心配はない。海外では、ゆっくりと重くのんびり生活していても場所はいくらでもある。海外へでたら日本にいた時と同じ考えでせわしく人に先んじて生きようとすると、エクセントリックな人か、追われている泥棒と思われてもしかたあるまい。

国内で「せまい日本、そんなにいそいでどこに行く」というなら、海外では「ゆっくり歩こう広い大陸そんなにいそぐと笑われる」といいたい。

9. お返しを期待する習慣としない習慣

（異なったシステム）

近所の人で、困っている外国人の学生を下宿させ、家賃の支払いの遅れを認めるなど到れりつくせりの面倒をみたものの、ある日その外国人が下宿をでるに当って、感謝するどころか逆に礼金をとくそくしたり、自分で破損した窓ガラスやドアーのことなど頓着なくさってしまったと憤慨していたことがある。

また、在外の日系企業で外国人を雇い、仕事のこと以外の私的なことまでも親切に面倒をみてやったり援助したりしたものの、ある日突然給料の高い他の企業に転職してしまい、がっかりしていたとある日本人から苦情をきいたことがある。このショックは日本社会というものが同一民族で構成されており、島国で、大陸にある国のように異なる文化をもつ社会と隣接していないため、自分たち以外のシステムが存在するということを、実際に知る機会がなかったためであろう。日本人の人間関係の底流には常に相手に対する大きな

期待があり、お返しを要求している。そしてそれが当然のこと、人の道であるという考え方が定着している。この考えにたって異なる文化の人と接するといろいろな点においてこのようなショックをうけることが多い。日本のシステムでは、与えたものからは直接お返しを期待しやすい。日本の信頼関係はこのシステムを支えるものとして機能している。しかし海外にあっては、日本の場合と比較にならないほど流動性があるために、日本のこのシステムを移植することはむずかしい。

（ノブレス・オブリジェ）

「ノブレス・オブリジェ」という欧米の思想がある。すなわち、身分の高く生れのよいものにはそれに伴う高潔で寛容な行為をなす義務がある、という思想である。つまり、もっているものがもたないものに与えるのは当然のこととして受取られるから、お返しなどということは社会的に強制されないのである。

戦後、アメリカが日本やヨーロッパに積極的に援助したり、復興に努力したのもこの思想によるものでもあろう。しかし最近、アメリカで日本やヨーロッパに援助してやったのに恩を忘れたとか、裏切ったとかいう言葉をあまり聞いたことがない。又、援助によってアメリカにヒモをつけアメリカの企業、経済にプラスになったこともあまり聞いたことがないようである。しかし日本の開発途上国援助に対しよくきかれることは、国内にはまだ困っている人が多いのに開発途上国の連中を援助する必要はないではないかとか、援助をしてやっても少しも恩を感ぜず、逆にタイやインドネシヤなどは恩を仇でかえしている、こんな国に援助することは愚かなことだ、というものも多い。しかし、これは相手のお返しを期待しており、自分たち以外のものの福祉には無関心という日本的な考え方によるものであろうし、このノブレス・オブリジェの思想はでてこないのであろう。われわれ日本人はこのように相手のお返しを期待しすぎる習性がある。このことから絶望、落胆、憤慨などが起り、相手に対する優越感や劣等感となってあらわれているのではなかろうか。日本人の義理の習性はよいシステムとして永久に保っていきたいが、外国人と接する場合には相手のお返しを期待しないよう留意すべきであろう。

10. 制服の効用

外国である鉄道に乗っていたら、セーターをきた男がきて私に切符をみせろという。よくみたら鉄道員で、乗車券の検札をやっていたのである。また、外国で郵便配達人が、ポロシャツで配達しているのをよくみかけたことがある。これは一例であるが、このように外国では鉄道職員をはじめ公営事業にたづさわる職員には制服制帽はあるものの殆んど着用しないで仕事をしているものが多い。もちろん、機関士やその他の作業員のように汚れる仕事をするものは汚れるからきているのでこれは別である。日本では公営事業にたづさわる職員であれば誰れでも制服制帽は着用している。ところによっては、タクシーの運転士でさえ制服制帽を着用しているところもある。

日本人にとっては、外国で公営事業にたづさわる職員が制服や制帽を着用しないで働いている姿は、いかにもだらしなく、いいかげんで規律が保たれていないようにみえるかも知れないが、しかし決してそうではないのである。というのは、欧米人などは彼ら自身みずからを律するものがあるからで、制服や制帽を着用していなくとも職務を忘ったり、規律を乱すこともないからである。すなわち欧米人などの行動様式が個人的で自律的であるのに対し、日本人のは集団的、他律的であるという差異によるものである。彼ら欧米人などを律するものは彼ら自身にほかならないのである。これに反し日本人の場合はこの自律性がないので制服や制帽が規律の立法的な役割りを果しているのである。

防衛庁で働いている友人が、「制服をきていると身がしまる、退庁してから制服制帽をきて帰るのと背広をきて帰るのとは心の状態がまるで違う。背広で帰えると、ついよりみちしたり、パチンコをしたりして銭がかかるので、女房がなるべく制服をきて帰ってきて欲しいといった」ことを覚えているが、自律性のない日本人にとって制服というものはたしかに他律的集団における立法的な意味をになっているともいえよう。

戦前の大学や高校又は専門学校では全員制服制帽を着用していた。角帽も大学により型に特色があり、高等専門学校なども白線やジャバラをまいておのおのその特徴をもっていた。したがって、どこからみてもどこの学生かすぐわかるので、当時の学生は学校の名誉のために、それ程人に迷惑をかける行為はしなかった。また、「胸に五つの金ボタン」という歌さえ流行したものである。しかし、最近の大学では制服制帽を着用している学生は殆んどない。欧米諸国では大学生などには制服はないのをまねて、表面だけが欧米式になったのであろう。

しかし、現在の大学の姿はどうであろうか。他律的な立法権を有する大学当局は無力であり、自律性のない学生は烏合の衆である。一例をあげれば、欧米人などだったら、内ゲバや大学紛争の問題などは学生の自律性によりとっくに円満に解決されているはづである。もちろん、制服や制帽を着用すれば解決されるというわけでもないが、われわれはいつも制服をきたつもりで行動したいものである。特に海外へでるものには忠告したいものである。

11. 日本を叱ってくれる人

叱ってくれる人がいるうちは人は幸福である。だんだん年をとり両親も亡くなり、社会上の地位もあがってくると叱ってくれる人もなくなってくるとともに、やがて自分にも叱らねばならない立場がやってくる。叱らねばならないといったのは、人を叱ること程損な役目はないからである。叱って得をするものは叱られたもので、叱る方は嫌われるだけで損をするものである。してみれば叱られることは有難いことであり、叱ってくれる人がいるうちは人は幸福なのであろう。

このことは何も個人に限ったものでない。一国民においても同じようなことがいえるのではなかろうか。すなわちわれわれ日本人を叱ってくれる外国人がいることも又われわれにとって幸福なことではなかろうか。最近、日本や日本人について外国人の書いた著書が可成り出版されており、そのあるものは日本語に訳され出版されているものもある。これらの著書には、日本に対する思いやりのこもった理解や、好意的な同情や日本人の自尊心をくすぐるほめ言葉などもあり、又、なかには著者の理解不足や誤解から日本人をくさし、気分を害させるものもあるが、日本人への批判の言葉もまたわれわれにとっては良き示唆ともなるのではなかろうか。ピエール・ランディーの「ニッポン人の生活」に『日本に生きる機会をえて以来、私の心と精神をとらえて離さない日本という国に対する愛情につつまれている事実を見逃してはならない。この愛情は大使館のデスクに座っているだけで育てられたものではなかった。その裏には、日本をより正しく知ろうとするランディー氏のなみなみならぬ積極的な努力があったのである』と訳者はのべている。又、「超大国日本の挑戦」のハーマン・カーンは『なかには日本の何人かの友人の気にさわるような予測もあるのではないかと思うが、願わくばそのようなことがなければと思う』とのべ、更に『これらは片言たりとも悪意をもってそうされたものでないこと、友情に欠けた批判としてそうされたものではないことを了解していただけるのではないかと思う』と。又、トケイヤーは『日本に民主主義はない』に、『一般に、外人が日本について書く本は、私にいわせれば、歯に衣を着せた、日本人の心理をくすぐるようなものが多い。これは真実の日本人像ではなく、私の愛する日本の人達にも自らの真の

姿をまどわせる結果になる、とかねがね憂えているものである。そのような意味から、この本にもまことに失礼な題名をつけざるをえなかったのであるが、これはあくまでも私が、日本と日本人を心から愛する結果であることを申し述べて、読者の皆様の寛容を重ねてお願いする』とのべている。

これらの著者がのべているように、日本人を愛するが故に日本人にショックを与えるような言葉を書いたので、何も憎くて書いたのではないということで親が子を愛するが故に叱り、又先輩が後輩を愛するが故に叱ることなど同様の事である。

ソクラテスが『汝自身を知れ』といったように、人は他人を知ることなしに自分自身を知ることができないと同じように外国を知ることなしに日本を知ることもできないのである。この意味においても、外国人が日本人について書いた著書は、われわれに良き示唆を与えてくれるものである。してみればわれわれ日本人を叱ってくれるこれら外国人がいてくれることはわれわれにとって幸福なことであるし、特に海外で生活するものはこれらの日本に関する著書をよみ、日本を世界という大きな目から見直すと共に、国際教養を高めていくことが必要なのではなかろうか。

12、察しあう考え方

外国にいた時、あるバス停でバスのくるのを待っていた。バスが来たが、待っているので当然とまってくれるものと思いこんでいたものの、とまらず通り過ぎてしまった。

日本では乗客がバス停からのる場合、手をあげなくとも待っていればとまってくれるが、外国では手をあげないとまってくれない。日本ではバスの運転士は、バス停で待っている乗客の態度から察して、とまったり通過したりしている。慣れた運転士は、そのバスに乗る乗客は態度ですぐ察しがつくという。欧米人からみればよく察しができると不思議がるのも無理はない。これは欧米人にとって、察するということが不可能なほど困難であり、日本人にとってはあたりまえなほど容易なことである端的な一例である。

隣の人がある用事で訪ねてきた。用件はすんだのによけいな世間話が長く、早く帰ってくれないかと、時計をみたり、あたりをみわたしたりして態度でこれらをあらわす。相手もこの態度から察して失礼する。欧米人だったらこの場合、「用事がすんだから帰って下さい」とはっきりいう。相手も気分を害することなくあっさり帰る。これを日本式にやったら、おそらく二度と来なくなるだろう。

主人が残業で疲れて帰ってくるのを察して、妻は風呂を沸しておく。主人は予期していなかった風呂に喜んではいる。欧米人だったらこの場合、今日は風呂を沸さなかったのか、それならなぜ沸しておくようにいわなかったか、というのが順序で相手の心を察する思いやりはすくない。

職場で梱包するものが沢山あって一人でてんてこまいをしていると、有志が手伝いにきてくれた。しかし梱包が下手だったのであとからやりなおしたものもあったが、手伝ってくれた厚意はこれにかえがたいものがあった。これは日本でいう有難迷惑の一例であるが、欧米人にとっては全く理解できない。欧米人の考え方では有難迷惑どころか他人の仕事を手伝うと、結果がよかろうが悪かろうが、反対に当人の能力が足りないと思われ、かえって感情を害される恐れさえある。

このように日本人と欧米人とでは、相互理解というものに対する考え方が、まったく正反対ともいえる。このように、「察する」ということは、たしかに日本的なコミュニケーションの考え方で、欧米人には不可能なことであろうが、「察する」すなわち「相手の身になって考える」という日本的な物の考え方の美徳は、失いたくないものである。

また、言葉を使わずに理解し合うことこそ、日本式相互理解といえ

るものではなかろうか。

最近の若いもののなかにはこの考え方を捨て、欧米式にずけずけいう方式をもつものが増えてきたことは、まことに喫わしいとも思うが、外国で生活し活躍するにはそのような態度も必要ではなかろうか。

13. 親切過剰のよしあしを知る

連休に、ある温泉地へでかけた友人が、どこの旅館も満員だったので最低の旅館にしかも、相部屋に泊らせられたので、ある先輩がこの温泉地で旅館を経営していることにふと気付き念のためその人に電話した。電話を受けた先輩はもうすでに寝ていたが、起きて車で六キロ位離れたその旅館におもむき、その見知らぬ後輩を自分の知っている高級の旅館へ案内し、更に前に泊る筈だった旅館の宿泊料まで支払ってくれたとのことで、この友人は大変感謝し、実に思いやりのある親切な人だと筆者に語ったことがある。日本人間では、たいして知らない人でもこのような親切をうけると思いやりのある人と感賞され、その誠意に感動されるものである。しかし西洋人にはこのようなたいして知らないものに対するオーバーな親切は、親切過剰としてかえって誤解を招かれやすいのである。日本人は親切にされればされたことを忘れないし、オーバーすぎる親切の中から相手の誠意、熱意を汲みとるが、西洋人には日本人のように他人をものすごく親切にもてなす習慣がない。逆にオーバーな親切をすると、なぜ私にこんなに親切をしてくれるのだろう、何か魂胆があるのかもしれないと疑われ警戒される。反対に親切すること自体が楽しいのだから、こっちもあえて親切を受けようじゃないか、親切を受けとることは相手を楽しませることになると考え相手がバカにみえてくるとある外国人は言っている。千石保が『日本人の人間観のなかでのべているように、西洋人にとって最も大切なことは、個の存在、個の自立が脅かされることだと考えられる。だからこのようにオーバーな親切を受けること、一方的親切を受けるのが恥であり、自立が脅かされ、自己の存在が無となることに最も恐れを抱いているからであろう。

西洋人社会では、たとえ知人や友人であっても、もてなす場合には、自宅へ夕食に招待したり、観光地を案内したり、ちょっとした贈り物を渡したり、そのほか相手から頼られたことだけすることで、日本人間のように高価な贈り物をしたり、頼みもしないのにバーやキャバレーのすみずみまで案内したりするようなオーバーなもてなしはあまりしない。ある日本人青年が日本で親しく交際したアメリカの友人を、アメリカ滞在中にその友人宅を訪問したものの、たいしたもてなしもなく、がっかりし期待はずれだった話をきいたことがあるが、西洋人には義理や恩などはなく日本人の間で行っているようなオーバーなもてなしはないのである。

日本人は相手が西洋人ということですぐ信用してしまうし、西洋人を信用したばかりにだまされてひどい目にあう例が多い。これに反し、西洋人はまず人を疑ってかかるので、日本人のようにそう簡単にはだまされない。日本人とは違い西洋人はよっぽど親しくならない限り決して腹を割らないし、他人との間に常にある程度の心理的間隔をおいている。千石氏は、欧米人は他人不信から、日本人は他人信頼から始まるといっており、『イギリス式文化は、まず他人を疑うことからスタートしている。だからこそ、常に自己防衛が行動基準になる。しかし日本文化は自分の身を守ることにより、他人に対する善意が優先している。それは「他人信頼」の文化の基盤をもっているといえる。イギリスにおける親切は、深入り型であってはならぬ。少くとも、親切がアダとなって返ってくる恩は避けねばならない。その深入り回避は、他人に親切にするため、最低限守られねばならぬルールである。他人に親切を期待してはならない。少なくとも日本人のような親切を期待してはならない』とのべている。要するに西洋人の親切は相手からた

のまれたことをやるのが習慣であり、たのまれないことを勝手にやってむこうがその親切を感謝しないからといって怒るのはどうやら日本人の間でしか通用しないようだ。日本人間のオーバーな親切やもてなしは、外国人には誤解を招きやすいことを知っておかねばならない。

14. 謙遜のよしあしを知る

外国人が奇異に感じることに「きたない家ですが」とか「お口に合わないかも知れませんが」とか「何もありません」とかいう日本式のへり下った招待の言葉である。実際きたない家であったり、大したご馳走もなければそれですむが、逆に目を見張るほど豪華な家であったり、大変なご馳走であったりすると、日本人だったらあたりまえだが欧米人にとっては「ウソつきだ」となってしまう。

もちろん外国人の中にも「簡単な食事しか準備できないが、よろしければいらして下さい」と言って招く人もいるが日本人のような表現はあまりしない。外国人は相手におくり物をする時に「私からの最高のおくり物です」といい、確かにそうあるべきであるが、われわれ日本人はなかなかこう言えないものである。自信がないというか他の人より下になることで安心するのか、あるいは常識的にいって「つまらないものですが」とか「お気にめすかどうか」と言いがちである。日本人には「謙譲の美徳」という言葉がある。たかぶってみたり尊大にかまえたりしないことがいいことなのだ。ところがこれもあまり控えめに応対し過ぎるとかえって逆効果になる。「あの人はとても自分をわきまえた礼儀正しい人だ」といわれずに「ウソつきだ」といわれてしまう。「英語はあまりしゃべれません」などといって流暢に話したりすれば、かえってなにかこんたんがあると思われてしまう。

ある欧米人の夕食に招待された時、「今晩は娘があいにく外出してしまい会わせることができず残念です。娘は金髪で背い目でハリウッドのある女優に劣らない美しい人好きのする娘です」といわれたことがある。日本では自分の子供を豚児といったり妻を愚妻といったりする習慣があるが、欧米人にとってはこれは謙遜の美徳と思うよりも、封建制度の上下服従関係の名残りで卑屈な態度の現われとしか、考えられないとのことである。外国人に対しては非合理な日本的表現はできるだけ避けることが必要ではなかろうか。

日本人は自分の国民のことをエコノミックアニマルといったり、自分の国を公害や物価高や人口過剰だの何やらであまり住みよい国ではないといっているが、外国人からみた場合日本は日本人自身が外国人に対し言っている程悪い国ではないし、外国で日本人をエコノミックアニマルと思っている人も殆んどいないとのことである。

アルフレッド・ショルツが「怒れ日本人」のなかで『日本では美徳とされている謙遜、遠慮などはけっして通用しない。美徳ではなくタブーである。ほんとに程度の高い、教養のある西洋人なら理解するかも知れないが一般には「自信がないからそんな謙遜をするのだ」と受けとり、もし「強い」のを謙遜して「弱い」といえばこいつは二重人格だとなるのだ。謙遜も遠慮も日本人社会の団結や調和の中でこそすばらしい効力をもつ。しかし独立一本やりの西洋ではまったく色あせてしまうのである。』といっているが、いずれにせよ過少表現や極端なケンソンは外国人に対しては逆効果となることもあるので注意したいものである。

15. 海外では「出る釘は打たれない」

ブラジルで数人の現地人とあるレストランで食事をした時のことである。注文にきた給仕に一人一人が、メニューをみながらこまかく注文するのには驚いた。全員の注文が終るのに十分以上もかかったようである。日本人だったら、メニューから各人が注文するということも

しないで、誰か一人が何かを注文すると、全員がそれに同調することが多いので、給仕からみれば日本人客の扱いほど世話のやけない客はないであろう。同じようなことが流行の場合においてもいえる。欧米では流行は自分でつくるものであるが、日本人は、あるものが流行すれば猫もしゃくしもそれをまねるので、流行によって儲ける商売が一番あたるといわれている。これらのことは日本人が欧米人と異って、他人は他人、自分は自分という自主性に乏しく、個性というものがなく他人や集団に同調していく習慣の一例にすぎないが、他人や集団と同じになるということは、自由ではなく不自由なことなのである。他人の人生にまねて自分の人生をつくることは自由ではない。したがって、欧米人にとって、このような日本人の個性のない習慣にはなじめないし、ショックであり理解できないのであろう。パーティで酒をのんだとき、全員で手をたたいて歌をうたうが、欧米人にとってショックであることは、他人や集団にむりやり同調させようとする日本人の習慣を嫌うからであろう。日本人が会社や役所などで、みんな立ち上がってラジオ体操をやっているのをみて、ある欧米人が、『それぞれ違う個性をもった大人が号令をあわせて品物のようにならべられ、ロボットのように手足を動かすことは、馬鹿らしくて一人前の人間にできるはずがなく、個人の尊厳を傷つける行為だ』といっている。

日本人は誰もが例外なく髪の色が黒く皮膚の色はだ色で、体型は胴長短脚である。しかし欧米人などは雑婚の結果、頭髪の色や背丈や体型は千差万別である。このような日本人の同質性は単に肉体的ばかりではなく、精神的な面や思考方法にまで及んでいる。そしてお互いが同質であるため、他人もまた本質的に同質だという考えが身についており、現地人も自国民と同じように思考し行動すると、ひとりで決め込んでしまう傾向が強い。だから日本人同士では、「どうも」とか「よろしくお願いします」とか「いずれまた」とかで用が果たせるが、このような表現は欧米語にも適訳がないように、欧米人に対しては全く通用しないのである。加藤諦三は『他人を恐れず』の中で『自分と他人とは異なるのだ、という理解が、日本人にはきわめて少ない。個々人が異なるものである、という認識ほど、自由にとって大切なことはない』といっており、さらに『個人個人が異なるのだという理解を欠いた国では、たえず、自分を正直にだすことに抵抗がある。たえず、自分をいつわって生きていかなければならない』といっている。『出る釘は打たれる』とか『長いものに巻かれろ』とか『相手の出方次第』とか、日本人がよくいう言葉があるが、これは日本人の集団に追従し、個人的な決定と責任に対する恐怖が存在していることであろう。個人主義には必ず個人の責任がついてまわるが、日本人はなるべく責任をとらなくともすむような立場を探しまわっているようである。このように責任をとるのを恐れ、他人を捨てられないでその他人にまつわりついて生きていくようなものは、日本から一歩外へでたら、全く相手にされないのである。海外では『出る釘は打たれない』のである。

16. 郷に入りては郷に従え

「キリスト教も知る」

日本ではイブにはデコレーションケーキがとぶように売れるし、クリスマスカードは年賀状なみに交換されている。ある欧米人から日本人はキリスト教徒でないものまで欧米人と同じようにイブを楽しみクリスマスカードを交換しているのが不思議だ、といわれたことがある。筆者が海外にいたとき、あるユダヤ系の人と交際したことがあるが、彼らはクリスマスカードも交換しないし、カソリック教会へ行っても十字を切らない。彼らがひざまずくのはどうやらユダヤ教会だけのようであった。

欧米人は子供が生まれると、何んと名前をつけたとか、また結婚すると、奥さんの名前を教えてくれと無性に興味をそそぐ。もちろん、

名前といっても英語でいうクリスチャン・ネームのことで、日本語の名前のことでない。現地で日本語の名前をいって笑われたこともある。欧米系諸国のクリスチャン・ネームは各国語によって綴り方や、よみ方が異っているとはいえ普遍的に同じである。要するに欧米では改治も道徳も社会生活の基盤もキリスト教にもとずいており、キリスト教を知らなければ欧米の文化も国民性も理解することはできないであろう。

日本は宗教について特にこだわらない自由で平和な国である。しかし海外では宗教については極めて敏感である。宗教上の対立から未だに戦争が絶えない国々も沢山あることからでも納得できるであろう。海外渡航用の査証書類の宗教の欄には、日本人は一応「仏教」に統一している場合が多いが、欧米人のキリスト教ほど個人の魂にふれていないし、道徳や社会生活上の基盤には彼らほどにはなっていないようである。

だが海外では絶対に無宗教では通らない。無宗教のものは、ロバか馬で人間として取扱われない。また、神道ということにも場合によっては注意せねばならない。何故なら神道は個人の魂の問題にふれる世界宗教でなく単なる民族宗教にほかならないからである。すべての人間が魂の奥底に共有する根本的苦悩は神道の与り知らぬところでありキリスト教と違って一人一人の人間が抱いている悲しみ、苦しみ、悩み、そういうものを無視した国家宗教だからとも思われるからである。

宗教論や信仰論は一応別として、時には教会を訪れることだ。そして陶然として賛美歌と説教に耳を傾けておけば、心は遠く俗世を離れてよいレクリェーションとなるであろう。海外にでるものは相手国の言語風俗習慣生活態度などを知ることが肝要であると同時に宗教についても深く知り理解することもまた肝要ではなかろうか。

17. カルチャーショック

謙遜したためウソつきと思われたり、遠慮したため損をしたり、無理に酒をすすめておこられたり、義理や恩が無視されたり、われわれ日本人が海外にでた時受けるショックは大きい。このように異文化に接した場合に受けるショックを、カルチャーショックといっている。

海外で日本人がカルチャーショックを受けていると同様に、在日外国人もこれを受けていることも知らねばならない。ある週刊誌によると、在日欧米人の神経症患者の約三分の一が訴えたのは、このカルチャーショックということで、その例で一番多いのが立ち小便、人前で鼻くそほじくる。パーティで歌うことだそうである。立ち小便や鼻くそをほじることでショックを受けるのは、なにも欧米人に限らずわれわれ日本人でもショックであるが、前の紙面でたびたびのべた通り、パーティで歌うことも外国人に極めて不快なショックを与えることを知っておかねばならない。

日本人のいろいろな動作は実にこまかい点にいたるまで欧米人とは正反対なことが多い。礼儀作法やエチケットもさかさまである。しかし、風俗習慣やエチケットなどは各国によって違うものであり、要は常識である。立ち小便や人の前で鼻くそをほじくることが、日本人がみても不作法なことだったら流儀が違う外人がみても不作法なので、本当の心配は現在の日本人が日本人のエチケットを失っているということであろう。

日本にいる欧米人が日本語で、話しかけたのに英語で返事されたとか、日本語で朝日新聞といったのにジャパンタイムスをもってきたり、日本に住む欧米人はしばしば不平をのべている。日本人は自分が外国に住めばその習慣にしたがっていくが、外人、とくに白人が日本の習慣にとけこもうとすると、へんな外人扱いをする。それは日本人の抜き難い欧米人への劣等感の表れでもあり、毛色の変ったものを排斥す

る料簡の狭さの告白でもある。日本にいる外人への本当の親切とは手取り、足取り世話をやくことではなく、日本人の社会に入ってきたければどうぞと分け隔てなく遇することであろう。中根千枝は「適応の条件」のなかで『日本人は自分たちを外国人がよく理解していない、とか外国人には日本のことがわかるものか、という気持が相当強いが、もしそれが事実であるとすれば、日本人は外国の人々をよく理解していないし、外国のことがわかるはずがないということになる。これは相対的なもので、外国人にとっては、どの国の文化をとっても理解の限度はあるが、国によって理解できる国とできない国があるなどということではない。「彼らにはわかるものか」という日本人の気持は、日本人側の彼らに対するカルチャーショックを反映しているものにほかならないのである。

私たち日本人がこのカルチャーショックをのりこえない限り、日本人に対する必要以上の悪感情は去らないだろうし、外人たちも、本当の日本人の姿、日本社会のよさ、複雑さを知ることは困難であると思われる』と書いている。

外国人の中には、日本を見下しているものもいるだろうが、その場合も一因は、外国人の心のとびらを開こうとしないわれわれにもあるといえるであろうし、海外で生活するものも、日本国内と同じような気持で現地人と接触していては、日本人に対する不評、疑惑、敵意をかうばかりで日本人自体がたちゆかないのであり、現地人に受け入れられない限り、何一つ本格的な仕事はできないことを心得るべきである。

18. はっきりした表現とあいまいな表現

欧米人は「イエス」でなければ「ノー」だという。イエスでもノーでもないような表現は使われない。ところが日本語では、イエスでもノーでもないいろいろな表現が使われている。また、その方がお互いの感情を害することもなく気分が良い。欧米式に、イエス、ノーをはっきりいうと冷たく感じて愛想がなく、あと味も悪い。女性にいたってはなおさらである。日本では日常生活における対人関係のあり方でも物事をはっきりさせるとか、はっきりいうということは好まれない。「ここではっきりいっておきますがね」というせりふはむしろ敵意をふくんだ排他的な態度に使われる。

外国で女店員に「乾電池がありますか」ときいたら「ノー」の一声で返事され不愉快な思いを幾度か感じたのも私だけではないであろう。日本だったら「はい、あいにくきらしていて」ということで十分にコミュニケーションはなりたち気分を害することはない。というのは顔色なり言葉の調子などでこの店にはその商品がないかどうかおのずから解るからである。外国人には今きれてる、といってしかもいつ入るのか分らないときては腹立しくなるばかりである。

欧米人は日本人のいう「いずれまた」とか「そのうち」とかいう表現は（もちろんこれらの言葉の通訳は欧米語にはないけれど）全く通じないらしく、逆に腹立しいといっている。日本では日常「どうも」という表現がひんぱんに使われている。「どうも」だけであとは言わなくとも、感謝、謝罪、挨拶などが万事相通ずる。ベンダサン曰く、『日本では「以心伝心」で「真理は言外」であるのだから、したがって「はじめに言外あり、言外は言葉と共にあり、言葉は言外なりき」である。日本教の基本理念である「人間」なるものは言葉では規定できない。したがって「人間は言葉にあらず」、「言葉で規定したとき人間は人間でなくなってしまう。日本教の世界に外国人は絶対に入れないし、外国の宗教も日本には絶対に入れないのである。いくら聖書を日本語に訳しても、日本人はもっとも大切なことは言葉によらず言外によるからこれはもういかんともしがたい。「日本人は結論をはっきり言わない」などという感想をのべるなら言う方にはじめから日本

人と語る資格がないのだ』と。

してみれば欧米人に比べて日本人はそういう点で敏感さの度合がずっと高いということになる。また、日本人は一般にはなはだお人好で人の気分を少しでも傷つけることにたえられない神経をもっているからでもある。日本では前にのべたように「以心伝心」という言葉もあって、心に思っていることが黙って向い合っていても自らそれが先方の胸に通ずるという暗黙の諒解の方が美徳なのである。しかし、外国人に対しては日本的な以心伝心は通用しないので、はっきりした表現で対応せねばならない。特に外国に行く女性たちには忠告したい。

なぜなら、日本人はイエス、ノーのかわりに笑いをもって答える場合が多いからである。日本人が笑うとき、それはむしろ承認の意味にとられても仕方がないからである。また、日本人は外国人と交渉するさい、「この問題については善処しよう」とか「前向きに考えよう」というあいまいな表現を使うが、これは先方に好意的に考慮することを約束したものと解釈され誤解されやすい。できないことはその場ではつきりと「できない」と断った方が誤解をまねかないですむ。

日本語のあいまいさは独特の味わいのものだけれども、それは日本語の内づらであり、外づらではそれを捨てるべきである。

19. 和製英語は英語国でも通用しない

最近やたらと横文字の単語を入れて書いたり話したりするものが多くなってきた。喫茶店やレストランで客の注文を取りつぐものが、「ワンホット」、「ツーアイス」とか「オールスリー」とか、（さすが、すしやでは聞いたことがないが）全くおかしい。ブラジルやアルゼンチンやその他ラテンアメリカ諸国でもこのような場合、外国語でいっているのを聞いたことがない。

しかし、日本で使われている横文字の言葉が外国でそのまま通用すると思ったらとんでもないことである。日本でアメリカ人と知りあったある青年がアメリカ人に「あなたはエッチだ」といったら、先方は「エッチとは何の意味だかさっぱり分らない」といっていたというが、日本で使われている横文字にはこれに似た日本人だけにしか通用しない和製外国語、特に英語が非常に多い。

『日本人は死んだ』の著者トケイヤーは「日本式英語こそ笑いのタネ」といって、「理髪屋さんの店先に英語で、ヘッドカッターというふうに書かれていることがある。これはつまり、「首切り職人」という意味になるので、全くおかしな英語を理髪店のご主人は自分の店先に掲げているわけである』といっており、さらに『警察の交通標識にも、たとえば、バーチカルパーキング（Vertical Parking）というのがある。これをそのまま訳してみれば、車は、しっぽのほうを下にして、車の前方を上にまっすぐに空を向いて立ち上がって駐車しなければならない、という意味である』と書いている。

また、こういう話もある。外国で、ある奥さんが「あなたのご主人は何をしているか」ときかれた。「主人はどこどこの大学の工学部を卒業して、これこれの会社のエンヂニアだ」と言ったら、エンジニアという言葉をきいた奥さんは「それならばご主人の洗たく物が大変でしょう」といったそうだ。つまりエンヂニアというのは大きな蒸気機関でも動かして油と汗にまみれて働く人間というものを連想するらしい。ところが反対に日本の奥さんが「自分の主人はどこどこの大学の工学部をでて、どこどこの会社のコンピューターをつくっているエンヂニアです」といったら、コンピューター産業のエリート社員が連想される。

英語に限らず、例えば和製フランス語もそうである。フランス語のアベック「AVEC」は日本では男女同伴の意味にとれるが、フランスではそのような意味はなく、英語の前置詞の WITH の意味のときと同じく、「共に」という副詞以外には使われない。「マダム」とい

うと日本では、バーやキャバレーの女主人を連想しがちだが、原語のフランス語は既婚の夫人または婦人顧客に対して使われており、日本でのように水商売的な観念はない。また「アベックパトロール」などは和製フランス語に英語を加えたもので、日本人だけしか通じない。

これこそ和製英仏アベック語であろう。

このように日本で無意識に使われている和製外国語の単語をあげたらいくらでもある。日本人が勝手にこういう意味だろうと思いこんでいる「意味」はこんなふうにしばしばくいちがう。横文字で書いてあるから英語だろうと思いこみ、英語なのだからアメリカはじめ英語系諸国で通用すると思ったら大まちがいである。海外へでたら和製外国語はそのまま通じないことを知るとともに、日本語に横文字の単語を入れて話したり書いたりすることも外国人に対してみっともないことであり、また日本語を大事にしていないというだけでなく、その横文字の下敷きになっている外国語をも、大事にしていないということであるのでつつしめて留意したいものである。

20. 日本人だけでかたまると嫌らわれる

悪評高い団体旅行

前の紙面でも書いたように日本人程団体旅行の好きな国民はない。しかし、日本国内なら結構なことであるが、ひとたび海外へでたらマナーには充分に留意しなければならない。外国で日本人がもっとも嫌われるのは、レジャーやパーティーなどの場所に日本人だけがかたまり現地人との交際をしないことである。外国で日本の団体旅行者をみると、またヒロヒトの軍隊がきたとか、日本の探検隊がきたとか現地人の評判が悪い。全員がくっついて右へ左へと動く様子は、現地人には異様にみえるのである。

全員が同じような服装に日の丸印入りの名札を付けて集団行動をとる姿は、いったいどんな印象を外国人に与えるだろう。日本人旅行者のだれもが写真をとりまくる行為の中には、国際的に忌避される模倣、盗用を犯す面もでてくるであろう。

マナー無視の集団

日本人だけがかたまるだけでも現地人に不愉快な感情を与えているのに、これにマナーをわきまえないときては現地人から嫌われても致し方ないであろう。ニューヨークのあるホテルで、日本人の男ばかりの団体がレストランの半分以上を占め、しかも酒をのみ大声で話し、トイレに何回もたち、しかもハンカチで手をふきながら、甚しいのはズボンのチャックをしめながらもどってくるのを、居合せた外国人客をはじめボーイ連中があきれて見物していたが、全く穴があったら入りたかったことがある。

国際マナーは欧米人のマナー

前にも述べたように国際マナーは欧米人のマナーである。東南アジアやアラブ、アフリカ諸国もかつて欧米人の植民地であったのですべて欧米人風のマナーである。日本人のように直接欧米人の植民地にならなかった島国にとっては欧米人風のマナーにうとく、また現地人のマナーをわきまえないことがどんなに悪評をかうことがあるかを納得できないであろう。しかし日本の風俗習慣やマナーなど国際的には全く知られていないし、日本人の風俗習慣がそのまま欧米人のそれに通ずるものはほとんどないどころか、あらわし方が反対の場合も多い。例えば日本人はマッチをするのに押してするが、欧米人は引いてする。釣銭のだし方も日本とは逆にこまかい端数から大きい単位にむかって釣銭を渡す。また、欧米の婦人にはできるだけ肌をみせるようにと服がつくられているが、日本の婦人には肌をみせるのは貞淑でないとして

なるべく肌をみせないようにつくられている。着物などはその一例であろう。これらと同じようにマナーにいたっても同様に欧米人とは反対の場合が多い。雑者がある国で人種差別をうけた時は、全く不愉快であったがよく考えてみると差別される方にも手落ちがあるのではないかとも思われる。人種的偏見も一つはマナーくずれにもその原因があるともいえよう。海外へでたら欧米人のマナーをわきまえ、日本人だけの社会を外へもちこまないことが必要であろう。

21.「和」と「対立」

英和辞典和英辞典とか、日本では日英とはいわずに「和」が日本又は日本語を表す言葉として用いられている。和服和食和室など日常生活にいろいろと和のつく言葉がある。「和」は大和国の和に由来していることは誰れでも知っているが、この「和」の精神が日本的考え方の根源となっている。しかしこの和の精神が西欧的な考え方とは著しく異っていることに気付かねばならない。「和」とは一口にいって調和であり、調和こそ至高の徳であり、集団決定、集合的願望は不一致、嫉妬を取除くものだとわれわれ日本人は無意識のうちに考えている。

しかし西欧的な考え方によれば、たった一人の個人が、社会のすべての人間に対抗して毅然として存在することが力強い行為であり推奨されるという考え方である。しかし日本的な考え方は個人として無駄なあがきをするよりは、社会的に仲良く調和していった方がよいと考えやすく、その個人の属する集団の中で、個人的な安全感を得たいと考えやすいのである。したがって日本人は対立を好まいし対立を恐れている。前にも述べたように、日本人が自己主張に乏しいというのは、日本人は自己の主張よりは相手方の主張を容れる特色をもっており、その根源において対立を前提としていない。しかし、日本人が対立を嫌うのと同じくらい西洋人は「和」という言葉を個性をおびやかすものとして嫌っている。西洋人にとっては、進歩は対立によってもたらすものであり、集団の中に自己を没し去る日本人の考え方に納得がいかないのである。西洋人は姿勢がよく威風堂々としているし、足取りや手の構えもしっかりとして落着いて歩くのに反し、日本人は姿勢が悪く、視線恐怖症が多く頼りなげで心細く見えるのも、日本人が個性に乏しく集団的で他律的であり対立を恐れているが、その姿勢の悪いことなどと深いかかわりがある。又西洋人が威風堂々とみえるのは、彼らの不変的、恒常的な自我と無関係ではありえない。

日本の会社員は会社あっての「私」だと考え、会社のために「私」を犠牲にするが、西洋人は反対に、会社より自己の存在に重きをおき自己の生活を最優先に考える。西洋人にとって、謝ることは屈辱を意味する。したがって、前にも述べたように、こと金銭上の出費がともなうことについては絶対に謝らない。日本人のように詫びて相手と同化することは思ってもよらぬことである。西洋人は人の前で自分の妻や子供を絶賛するが、日本人は愚妻とか豚児といった表現をするのも、対立のある西洋人社会には不安感があり、和や並立を好む日本人社会には安心感があるからこそ、そこに表現の相違が生ずるのであろう。日本人は妻と一体だという考えがあるから卑下してもよいのであり、西洋人は妻が自己と対立の立場にあるからこそ褒めねばならないのであろう。

ベンダサンは、「人間みな兄弟」といった場合、西欧的な考え方では、人間は相互に別々の伝統に生きており、それを相互に認めるという相対主義的な意味の兄弟であるが、日本的な考え方では、人間一皮むけば、いわば『裸になってつきあえばみんな同じく自然の支配下にあり、自然教に従っている人間だ』という意味になってしまうといっているが、これは、親切過剰が西洋人には誤解を招いたり、謙遜が西洋人にはウソツキと思われたり、遠慮が西洋人には腹立しく思われたり、日本人は他人をすぐ信用するが、西洋人は他人を疑ってかかること

と、その他多くのカルチャーショックは結局このような考え方の相違に由来しているのだろう。

日本人は西洋人を、しゃべりすぎて、おっちょこちょいとか、高圧的だと思い込むことが多いが、反対に西洋人は、日本人は何を考えているかわからない、無気味だとか、うすおろかと思いこんでいること、又、日本人間では、以心伝心とかいう言葉があって、心に誠さへあれば、黙って向い合っていても自らそれが先方の胸に通じる暗黙の諒解の方が貴いという信念があり、又、日本語が定冠詞不定冠詞の不在や主語の不在や、冠詞に乏しいことで欧米語に比して極めてあいまいな言葉であるのに反し、西洋人は自己主張が強く、欧米語がはっきりした言葉で、論理的に展開されていることなど筆者がこれまでのべてきたすべてのマナーや考え方の相違やあべこべの習慣の根源が、この「和」と「対立」の文化の相違にあるのであろう。加瀬英明は「日本人の発想、西洋人の発想」のなかで『日本人に自分が属する集団に忠実なあまり、集団志向性が強すぎて、自分を個人としてみようとすることが少ない。自分をないがしろにしてしまうので、個人から生まれる創意に欠けることになるし、自己を殺して集団に合わせようとするので、付和雷同が得意である。しかし、これからの日本は、「自分」を持っている者が必要とされるだろう。洋の東西を問わず、ことをなした人物は、自己を確立しており、自分のものを持っていたからこそ、社会に提供することができたのである』とのべている。

最近、日本人論がいろいろな人によって取上げられ、自己批判されているが、われわれ日本人は卒直に国際的に特異な民族であることを認識し、国際行動を自己規制していくことが必要なのではなかろうか。「和」の文化と「対立」の文化の価値観の相違が日本人と西洋人のマナーや考え方の根源であることを強調しておきたい。

22. 外国人にない視線恐怖

欧米人は話をするとき相手の目をじっとみつめて決してそらすことがない。海外では相手と話をしながら視線をそらすという態度は大変失礼な態度とされる。イタリア人などは、とくに女性と話をしているときは瞳の奥までのぞきこむようにしている。これは女性に対するイタリア男性のエチケットだそうである。しかし日本人は一般に視線をそらして話をすることが多い。勿論、重要な話をするときとか、喧嘩一歩手前の感情的な状態などとか、剣道や柔道などの試合のときなどとかには、日本人も欧米人と同じように相手から視線をそらすことはないかもしれない。欧米人は頭をあげて相手の目をみつめながら握手するが、日本人は目をみつめるどころか頭をペコペコさげて握手しているものが多いが大変みっともないことである。このように視線をそらすという態度を「視線恐怖」といっている。欧米人に少なくて日本人に多いのは「視線恐怖」「対人恐怖」「赤面恐怖」などの対人関係だといわれている。視線を気にするのは日本人の特徴で、目と目を合わせないで話をすることが多い。「人と話をするときは、まっすぐ目をみて話せ」などとよくいわれるが、実際はその逆が多いので、こういうことがよくいわれるとも思われる。

戦時中、中学の入学試験が口頭試問だけになり、小学校で口頭試問の予行練習を行ったとき、先生から「君はあまり試験官の目をみつめすぎ、にらんでいるようで相手に悪い印象を与えるから相手のネクタイのところをみるようにしてほしい」といわれたことがある。時代劇でも、よく身分の高いものに下のものが話をするとき、相手の目をみつめるどころか顔さえあげられず、「ずが高い」「控えよ」とかいわれたりして相手の目を見つめるどころか顔も見られない。「おもてをあげえ」といわれてからやっと顔をみることが許されるのをよくみる。欧米では、どんなに目上の偉い人に対して話すときでも相手の目をみ

つめてそらすことはない。エリザベス女王が来日したとき、レセプションで在日外交団と挨拶したとき、外国人外交官が女王と話をするとき胸をはって女王の目からそらすことはなかった。

日本人にとっては微笑なしに、人の目をみつめて話されるのはあまり良い感じではないし、欧米人のように視線をそらさず話をする習慣にはうといようである。しかし日本人同志の間ならよいが、欧米人などにはこの日本人のマナーは逆である。話しながら相手から視線をそらしていることは前にのべたように欧米人をはじめ、どこの国でも大変失礼な態度といわれる。相手の目をみて話せないのは、その人にどこかやましいところがあるからだと思われ信用されなくなっても仕方ない。視線をそらすという態度については、そういう意味でどこの国でも共通の評価をしているようだ。

日本人に「視線恐怖」や「赤面恐怖」などが多いのは、長年の生活の中から、他人と対立することを極力避けようとする特性があることに基くものではなかろうか。外山滋比古の「日本語の個性」に『相手を指す第二人称単数の「あなた」というのは向うの方という意味であって、目の前にいる人を指すのには、はなはだどうかと思われるが、直接に指示しないところから尊敬の心が伝わる』といっており、更に『相手はばからず、思ったことを直言するのを英語で「スペードをスペードーと呼ぶ」と言う、スペードをスペードーと呼ばないで、目の前の人を向うにいる人のように言いあらわすのを美しいと感じる。「お前」にしても、相手の御前ということだから、やはり相手を外した言い方であるには変りがない。なるべく直接に触れない表現をすることが望ましいとされているのだから、話し合っている人と人との目が合ったりしないのは不思議でも何でもない。あまりじろじろ見られては気味が悪いと思う』とのべている。

海外では別にやましいところがなくても何となく気おくれしたり、恥しがったりすることから、相手の顔を直視できないということはそれだけでもマイナスになり、相手から軽べつされるだけである。外国人と話をするときにはどんなに目上の偉い人であっても目をそらさずに話すよう心得るべきである。

23、和洋異る財布の紐の管理権

日本ではふつう多くの夫は給与を妻にもち帰り、妻は夫に手当を渡している。五百円亭主とかいって毎日その日の昼食代やたばこ代などの小使銭としてそのつど渡している主婦連中も多いようである。そして主婦たちは日常生活の出費を管理し、家庭の主要な買物を考え、倹約をし、子供の教育の責任を夫と分ち合うか自分で担っている場合が多い。従って最近、母親の影響力が父親のそれを凌いで大きくなってきているようである。

もちろん日本人の家庭の全部がこうではなく、なかには逆に給与を夫が管理し妻にそのつど必要に応じ小使いを与えているところもある。

しかし欧米では日本のやり方とは逆にこの日本人の一部の夫のやり方と同じように、夫の給与は全部夫が管理し、妻の要求に応じて必要額を与えているのが習慣である。

ベンダサンはこのサイフのヒモをあずかる権利を経済的支配権といっており、『この権利がいかに強力であるかは、今さら説明の必要はあるまい。エコノミック何とか様は、それを十分に御存知のはずである。』といっている。そして更に『米国というお国はレディーファストであるが、原則としてサイフはジェントルにあずかっている。家政を男性が支配するのは、実にギリシャ時代以来の西欧の「悪しき伝統?」であるから、日本の「西欧化」がいかに進もうと、この点では絶対に西欧化せず、日本の醇風美俗なるものを断固として保持すべく、日本女性は、日々警戒を怠ってはならない』とかいっている。

欧米人の主婦は日本の主婦がサイフのヒモを握っているときいてう

らやましがっているとのことである。では日本の主婦たちが月給袋を全部渡されたからといって、より幸福であるか、となると必ずしも断定できないようである。日本の主婦たちはこう物価が高いと、とても給料だけではやっていけないし、やりくりの責任は、全部主婦に負わされることになり、かえってつらいといってなやんでいる。家計の優先支出順位は、毎日の食費、衣料費、学費など生活に不可欠のもの、次の順位として、せいぜい子供や夫のセーターや替えズボンにならざるを得ないし、自分の洋服を先に買うのは気がひける。とをると自分のための支出は常に最後の順位となってしまう。その最大の原因は家計を自分が預っているという事実にある。欧米人式に夫がサイフのヒモをあずかっても同じことがいえるであろう。

筆者の近所に欧米人式に給料を夫があずかり管理している家庭がある。彼の妻君は夫がいくらの給料取りか知らないといっているし、家計の責任はすべて夫にまかせているので、その方面のなやみはないといっていたことがある。あるアメリカ人が、『日本は男性天国のように思われる。日本人の夫は妻をこき使っているように思われるけれどアメリカと異って日本人の妻は夫のサラリーをそのまま受け取り、家計はすべて妻にまかされている。アメリカのように夫がサイフのヒモを完全に握っているのとはちがう』といい、更に『アメリカの妻は洋服やハンドバックが欲しいときは、訳を話して夫に頼む。夫はそれが必要かどうかを判断したうえで小切手を切る。家賃や電気代、ガス代にいたるまで小切手で支払う。だから十年以上も一緒に生活していながら、自分の夫の収入がいくらか知らない妻さえ少なくない』といい、日本は「女房天国」だといっている。

家庭内の経済的支配権が、日本人式であれ欧米人式であれ権利をかくとくしたものも、又は権利をあたえたものも、いづれにしても物価高の時代にはなやみの多いことであるが、海外にでるものは、この日本人夫婦と外国人夫婦のサイフのヒモの支配権の相違をよくと知っておくことも必要であろう。

24. 世界共通の飲酒マナー

大トラは日本人だけ

日航機に乗った日本人乗客の大トラが、飛行を遅らせる事件があった。外国人乗客は、日本人は何とハレンチなことをすると思ったことであろう。日本人の品位を著しく傷つけ、居合わせた外国人乗客たちに対しては全く穴に入りたい気持ちである。

外国では酔ぱらいの姿というのがまるで見当らない。かなり飲んでもしゃきっとしている。外国ではいくら飲もうとかまわない。しかし酔ぱらって人にからむとかダウンする人はいない、これが飲酒マナーである。パーティーでもまた友だちと飲んでも飲んで陽気に話したり歌ったりということはあるが、それはあくまでも楽しんでいるということが主題となっている。飲んで人に迷惑をかけたりすることはない。日本でのように徒党を組んで往来を歌って歩いたり往来に寝たりするなどもっての他である。

手をたたいて歌うのも日本人だけ

前の紙面でものべたように、外国人の飲酒マナーは日本人のそれとは全く違う。外国人のは食事のアペルチーフとして飲むのが普通であるが、日本人のは一般にうっぷんをはらしたり、さわいだりするための場合が多いようである。しかし外国人と飲酒する時は、この点充分に気をつけねばならない。外国でパーティーを行う場合、日本人だけで周囲に迷惑がかからない所であればいざしらず、外国人に招待されたり、また外国人を一人でも招待した場合は、絶対に日本式の飲酒マナーはさけるべきである。南米のある所でパーティーに招待された。そこには現地人が一人出席していたが、くどくどしい日本式の飲酒マ

ナーに愛想をつかし中途で退場したこともあった。また、ペルーで日本人二世たちだけのパーティーに招待された。スペイン語混りの会話の内容や飲酒マナーなどがすっかり欧米式になっていることには驚いた。酒がまわりはじめた頃、彼らの一人が、「日本人は自分が飲みたい酒を遠慮して飲まずに、他人に飲みたくない酒を無理にすすめるのがマナーのようである。また、歌を歌うのはよいが各自が得意な歌を披露するのは楽しいが、一般に遠慮して歌えないものに強いて、結局はまともな歌もきけず遂に合唱になり、手をたたきはじめて、日本独特のワインアニマルになる」と片言の日本語でいったが、これにも一理あるようである。

女性の飲酒マナー

最近ビールを飲んで帰るOLも多く又、女性専門のバーも満員とのことで、飲酒をする女性も可成りふえてきたようである。しかし、外国ではまともな女性が一人で酒を飲むということは、ほとんどありえないのである。もしそういう女性がいたら、男を待っている女としか思われないし又、その種のプロであると思われてもしかたがない。ことはホテルだからといって気楽になってグラスを傾けることはしてはならない。どうしても飲みたかったら、ホテルの部屋でカギをかけ、一人でグラスに向かうべきである。これが外国での女性の酒の飲み方である。

女性のいる前ではおげれつは上手に

日本では酒のメーターがあがってくると、おげれつになる場合が多い。女性がいても平気でワイ談を言うものも多い。しかし外国では女性がいるところでは絶対にワイ談はやらない。外国人は日本人と違ってユーモアにとんでいるので、お色気の話も上品にするので極めて楽しい。日本人にはどうもこのユーモアには欠けているようである。日本に行ったことのある、ある外国人が「日本の国電は全部ロングシートであるのには驚いた。特に空いている時には向い側の席に腰掛けている女性が脚が曲っているせいかほとんどヒザが開いているようにみえるので目の置きどころがなかった」と。

25. 国際社会でとるべき姿勢

「他国家に影響を与える国家は、その他の国家のためにどんなによい政策を取っても、必ずその国民の反抗運動が起る」……これは私が学生時代に学んだ国際法学者の故信夫淳平先生のいわれた言葉である。

終戦後、アメリカ軍の占領政策が比較的寛大であったものの反米運動が絶えなかったし、また日本が韓国やタイやインドネシアなどに対して行ってきた技術援助が、かえって反日運動となったことがそのよい例であろう。歴史を遡ってみるとこれらの例は枚挙にいとまがない。

つまり相手国住民の理解がなければどんなによい援助や政策を行っても反対運動が絶えないということである。即ち、民族は自己の動機、行動を自ら決定し、自ら実行する自由と権能をもっているということである。従って自国民の個性目的を主張するなら、これと同時に他国民の個性、目的をも承認し尊重し連帯性をもたせ、両国民の共存共栄をはからねばならないのである。

日本の対外経済援助が、内部指向的、反国際的であるため反日運動が絶えないのである。バンコックやジャカルタやサンパウロで勤務していようと、それは反国際的な日本企業の使用人でしかありえないのである。

どんな形であろうとも海外に住み、異境の地で活躍しようとするなら、その国で骨を埋める覚悟をもたなければならないし、こうした健全な思想をそなえて勇躍発展しなければならない。

彼らはよい意味での外国人とならなければならない。

アメリカに売られた自動車はアメリカ人のものになっても、日本製である事実は決して消えないことを認識しないとだめだ。

このことは、日本が誇りをもって行える国際協力の精神であり、世界が待ち望むものであり五十年、百年の後に日本の国際的地位を守ってくれる貴重な礎になるはずである。

文芸春秋九月号に、「沖縄に住みついた米兵」という記事があった。これは沖縄県石川市のジェリーボーコックさん（39）がその人。「四十八年沖縄で退役した元軍人で、米軍の将校クラブで働いていた好子さんと知り合い結婚、子供も日本語を話し日本の学校に通っている」という。

彼は子供の頃から農業がことのほか好きで、住みなれた沖縄でどうしても農業に専念し、野菜作りをしようと永住を決意したのである。今ではアメリカから新技術、新型機械などをとりよせ沖縄農業近代化に貢献しているとのことである。

これからの国際協力が人種や民族を越えたものでなければならないことを教訓としてわれわれ日本人に示しているよい例であり、正直に学び取る必要があろう。

海外の固有名詞

アルゼンチンでマッカーサーをマッカルツールといったり、アイヒマンをエイチマン、ジュネーブをヒネブラ、ミュンヘンをムニチなどといったりして日本と読み方が全く違っているので移住者も最初めんくらったようである。というのは、海外の人名地名など日本では大体その国の言葉の発音で読み書きされているからである。

しかし、海外ではこれと反対に一般に自国語の発音で読まれているので注意しなければならない。例えば、日本ではジュネーブ（Jeneve）を地元のフランス語をとって読んでいるが、英語では Geneva ジェネーバ、ドイツ語では Genvゲンフ、スペイン語では Ginebra ヒネーブラ、ポルトガル語では Genebra ジェネーブラとそれぞれ自国語式に書かれ読まれている。

同じように、クリスチャンネームなどは、英語のJohnジョンを、ドイツ語でJohanヨハン、フランス語でJeanジュアン、スペイン語でJuanファン、イタリア語でGiovanniジョバンニ、ポルトガル語でJoãoジョアンなどと、読み書きが自国語流にかわり、可成り異っているのに気づく。日本で読み書きされているのと可成り異っていることに注意しなければ国際標準語として通用しないおそれがある。

26. お礼は一度だけでよい

現地人から夕食に招待されたあくる日、歓待してくれた友人にエレベーターで出っくわした。

日本人式に「昨夜はどうも」といおうとしたが、適当な現地語が浮ばず、いつものあいさつだけで別れたが、なんとなく気がかりでならなかった。

しかし、あとになってヒヤ汗をかいた。というのは、白人社会では「昨夜はどうも」というお礼の習慣がないのである。

これを無理に直訳していうと「またやってくれ」と感違いされ、あらためて催促したことになるのである。海外ではお礼は必要な時に一度だけいえば充分なのである。しかし、別れてから手紙で礼状を書くのは日本と同じ習慣となっている。

親しみの表わし方の相違

日本人と白人とは親しみの表わし方が、そのよしあしは別として根本的に異っている。

しかし、前にも紹介したように、国際社会は欧米白人社会のマナーが占めており、おお方日本人が国際人として生きていくため

には、どうしても白人社会にとけこんでいかなければならないのである。

ブラジルで現地人の友人宅を訪問し、相手と握手をかわしたのち抱擁されて全く気持が悪かった。抱擁は欧米人が親しい間柄で行われる挨拶の仕方である。

即ち、お互いの右手で握手をしながら左手を相手の背にまわして背を軽くたたくのであるが、更に激しいのになると、両手を相手の背にまわして背をたたきあったり、頬まで寄せ合うのであるが、このことは日本人が不慣れなせいか、あまり喜ばしいものでない。

しかしよく考えてみると、同じ挨拶でも「おじぎ」をするより握手をする方が親しみ深いし、ごく親しい間柄で行う抱擁も考えようでは親しみがさらに深く感じるものである。

また、日本では挨拶や対話のなかで相手の名前を入れて話すことは滅多にない、しかし、欧米人の間では必ず、この場合相手の名前を呼んで話す習慣がある。この習慣も日本人のそれよりもはるかに親しみ深さを感じさせられるのも不思議である。

チリーの中学生向け文法の教科書に、「日本人は衛生を重んじる国民なので、挨拶するとき握手せずに深く頭をさげる習慣がある。どれほどの病気が握手によって移るであろうか。われわれチリー人もこの非常に衛生的な日本人の挨拶の習慣を学びたいものだ」という親目的な姿勢をのぞかせていたことも見逃せない事実であり、お互いにそれぞれの民族が持っている習慣を学びとらなければ、真の理解がなされないことを心がける必要があろう。

男ばかりの団体旅行

英国のある新聞に日本人の団体旅行を非難して「日本では男ばかりの団体旅行が相変らずマナーをわきまえず海外旅行をしているが、最近では、エコノミックアニマルがセックスアニマルと化し、タイ国や韓国では女性を日本人のセックスアニマルから守れという運動さえ起っているようである……」という記事があった。また、サイゴンでは、韓国行の経験のある男ばかりの日本人団体旅行に警戒心をもちはじめているとのことである。欧米では団体旅行はあっても、男ばかりの団体旅行というものはないので、日本の男ばかりの団体旅行が奇妙にみえるのであろう。欧米の団体旅行は、夫婦や家族ぐるみで行われるのが習慣である。筆者が海外で欧米人の団体旅行者としばしば観光バスなどでめぐりあったが、マナーをくずすことなく、ユーモアたっぷりで極めて愉快な旅行であったことを思いだす。日本にも、夫婦達や家族ぐるみなどの団体旅行も多くみうけられるが、この場合は欧米人と同様ユーモアはないとしてもマナーは一応欧米人並といえるかもしれない。何故なら家族ぐるみでは、男性も酒をのんで騒ぐ気分もなく、ホテルで女性をこいしがる気分もでないからであろう。欧米人が日本人の家族ぐるみなどの団体旅行をみたらおそらく日本人をセックスアニマルなどと思うものはないであろう。しかし、日本では、エチケットをわきまえない男ばかりの団体旅行、またはこれに職場の女性が加わったマナーくずれの団体旅行が多いことはまことに恥しいことである。新幹線の車内で、ある団体がステテコになって酒をのみ手をたたいて騒いでいるのを外国人がみて呆れはてていたことがあった。欧米人は日本人にくらべて、いろいろな人種が入りまじっているので、他の人種にみっともない行動をみせたくないという観念があるのであろうが、日本人は単一民族で外国人との接触が少なかったせいか、他人に迷惑をかけないというマナーに全く欠けているようである。男ばかりの団体旅行もよいとしても、海外マナーを充分にわきまえ悪評をまねかないよう細心の注意をはらうことが必要であろう。

27. ふた通りの「すみません」

外国では混んだ乗物から押しわけて降りるには、「すみません」とか「ごめんなさい」と軽い挨拶をして降りる習慣になっている。日本にいる外国人がこの場合本人が決して「すみません」とか「ごめんなさい」という軽い挨拶をしないことは、まことに遺憾だといっていた。

終戦直後だったか、満員の国電から押しわけて降りようとしたところ、出口の近くにいた二人の進駐軍兵士から大声でどやされ、寸前のところで殴られるところだったことがある。日本では混んだ乗物から降りる時、モグラのように押しわけて降りないと降りれなくなるので、一声かけて「おりますよ」とか「ごめんなさい」というよゆうもなくなったのであろう。

三井ビルのある階にフランス系の会社の代理店がある。そこの白人社員と朝の出勤時刻にエレベーターで出くわすことがある。満員のエレベーターから降りるのに一声もかけず日本式にモグラのように押しわけて降りていった。日本人の習慣にしたがったのであろう。いずれにせよあんまりいい気持のものではない。

外国人からいわせると、日本人社会は沈黙の社会で、乗物のなかでもみんなむっつり黙って、つまらなそうな顔をしており、無表情、無言でニコヤカさや明るさがないというのである。デパートのある混んだエレベーターで、止った階から乗ろうとするある日本語のできる外国人が「入ってよろしいですか」と一声かけたのに、乗客はソッポをむいて何も言わないのをみて、この外国人はあきれた表情をしていた。こんなことを繰返しているうちに、前の外国人のように日本式にモグラになってしまうのであろう。どうも日本人にはひとこえ口にするという簡単な習慣にうといようにみえる。前述したが、ブラジルに移住したある青年が婦人の足をふんで「すみません」、ベルドンまたはデスクルベという謝罪のひとことが即座にでなかったため、その婦人のハイヒールで殴ぐられたことを書いたが、こういう言葉はしばらくたっていったのでは効果がないので、即座にいえるようあらかじめ準備しておかねばなるまい。

このように簡単な時の「すみません」という軽い言葉を口にすることが欧米人の習慣であるが、しかしこの「すみません」という言葉も、ことが弁償に到る事件を起した時には言わない方がよい。日本人はこの場合には、正直にすぐ「すみません」と謝罪するが、外国人はこの場合は絶対に「すみません」と言わない。というのは、「すみません」と先に言った方が負けとなるからである。日本人同士のように、頭を先に下げて、円満に和解にもっていくという心理的戦術はとれないのである。あくまで法で争うしかないことがらに心情をもちこむのは外国では通用しない。外国である人が預っていた現地人女中が皿を落してこわしても、絶対に「すみません」といわなかったどころか、逆に、手に皿を洗った時の油がついていたから落ちたとか、この皿がすべるようにつくられているから落ちたとかいって絶対にすなおに「すみません」とはいわなかったとのことである。われわれ日本人にとってはこういう割りきり方は全く理解にくるしむものである。

岡田晋氏は「日本イメージ構造」の中で次のようにかいている。日本人の「すまない」は、多くの場合「世のなかに対して」であり、「世のなか」はあくまで〈生〉の領域である。ヨーロッパ人が「すまない」という対象は〈神〉であり、〈神〉に罪を認めることは、〈死〉の問題に結びつく。「すまない」は主体的問題であり、〈神〉との契約違反にまで発展する。かんたんに「すまない」ではすまない。

「すみません」も軽く口ですぐでるように気をつけていると同時に、ことが弁償に到るようなことを起した時には、うかつに「すみません」と言って損をしないよう注意すべきであろう。

28. スペイン語から ポルトガル語へ発音三十分

可成り学識のある人でも、中南米諸国では何語が話されているかはつきり知らないものが多い。英語だというものは最近では皆無のようであるが、スペイン語かポルトガル語かのいずれであるのか知らないものが多い。

ブラジルの国語がスペイン語だと思っているものが多いようである。ハイチがフランス語であることや、中米諸国がスペインであることを知っているものも恐らく少いことであろう。

最近スペイン語の普及はドイツ語、フランス語に次いで驚くべきものである。これに比べてスペイン語と同じイベリヤ半島のポルトガル語は、ブラジル移住用語として学ばれるほかはあまり研究されていないようである。しかし、近いうちに独立しようとしているアフリカのアンゴラやモザンビークもポルトガル語であり、当国の鉱物資源開発に目をつけている折から、ポルトガル語の研究も益々必要となってくるものと思われる。

ポルトガル語は、一一四三年にアルフォンソ、エンリケスがカステリヤ王国から独立後、スペイン北部ガリシヤ方言を基礎として派生したもので、スペイン語とは別の発達をとげたロマンス語であるが、一口にいえばスペインの方言であり、丁度東京弁と大阪弁の違いぐらいなもので、スペイン語をマスターしているものなら一週間も学べば、読み書き会話ともだいたいできるものである。

しかし、こうたやすくいってもポルトガル語の発音はスペイン語とは可成り違っていてむしろフランス語の発音に近いものが多い。特に鼻音、鼻母音はフランス語のそれと同音で、更にCh（シュ）、g（ジュ）、V（ヴ）の発音もフランス語と同音である。

このようにポルトガル語にはスペイン語にはない鼻音および濁音が割合に多いので、スペイン語のように奇麗とはいえないが荘重であり、また男性的でもある。スペイン語をマスターしたものがポルトガル語を発音していくには、つねにこの鼻音と濁音に気をつけていくことである。これ以外は両語とも発音は全く同じで、ただスペルが違っているだけである。

まずアルファベットからみてスペイン語、ポルトガル語で同一の名称は、a、b、c、d、e、f、i、k、l、m、n、o、p、r、s、t、u の十七で残りのうち、g、j、z が濁音となり、h、q、w、y は名称が違うだけで発音にはたいした相違はない。また、前にのべたように、v は英語やフランス語の発音と同じで、加うるに、x を「シャ」と読むことがある点が違っているにすぎない。例えば、Caixa、カイシヤ。次にポルトガル語の読み方と同じだがスペルが異っているのは、ll、～n、z がそれぞれlh、nh、ʒとなり、また、h が無声となることも両語とも同じである。このほか、ch がフランス語式に「シュ」と発音することは前にのべた通りである。（caballero→cavalheiro, hotel→hotel. espanol→espanhol, cheque シェーケ、azúcar→açúcar）

アクセントの位置は殆んどスペイン語と同じだがスペイン語のように不規則のアクセントに「´」強勢符をつけない場合が多く、この点はスペイン語を学んだものならすぐ合点がいく筈である（tomo→tomeiトメイ tomd→tomouトモー）ただ前にも述べたように、ポルトガル語には鼻音が多く、また最後に鼻音がくるものは最後にアクセントがくることに留意せねばならない。スペイン語のnの「～」をaとoの上につけ～a・アン～o・オンとなる。鼻音とは読んで字の如く鼻にも息をぬくもので風邪をひいた時のハナ声のようなものである。またSやZはポルトガル語では母音と母音の間にくると濁って「ズ」と読む。つまり濁音となる（Casa カーザ azul アズーウ）

以上のことだけ頭に入れておればスペイン語のできるものはポルトガル語も読め、そして理解できる。最後にブラジルでは語尾に「e」のくる単語は「エ」と読まずに「イ」と発音したり、スペイン語の「r」「rr」の一瞬動の発音がさらに強く振わせられ咽喉にひっかかって「フ」に近くきこえてくる（restaurante へスタウランチ）。

29. ラテン・アメリカにおける禁語句アレコレ

日本語をそのまま読めば、スペイン語やポルトガル語に共通する言葉は沢山あるが、つぎにあげる言葉は、ラテン・アメリカでは聞くにたえない卑語であるから、スペイン語やポルトガル語でいうように心がけねばならない。

ポルトガル語の場合「く」（Cu）のつく日本語には注意すること「く」（Cu）とは肛門のことで、これに語がつくと肛門の動作に関する言葉になる。例えば「毒」（Doku）「抱く」（Daku）「菊」（Quiku）などは肛門を与える意味で「飯食う」（Mexe cu）は肛門をかきまぜる意。「臭い」（Cusai）は肛門からでるの意。「苦心」（Cushin）は肛門OKの意となる。

また、スペイン語でもポルトガル語でも「鏡」（Cagami）や「科学」（Cagaku）の「かが」（Caga）のつく日本語は「脱糞する」の意。「魚」（Sakana）は男女の交。「筆」（Fude）は男女の交渉の意。「待った」（Matta）「待って」（Matte）は、殺すの意。

いずれも、これらの言葉は、使い方に充分注意しなければならない。

南米を侮ってはならない

最近では、扇風機などはあまり使われず、クーラーや冷房装置をとりつける家庭が増えてきたようである。

ところが、クーラーや冷房装置のまわる音でやかましく、隣近所に非常に迷惑をかけたり、また、貧弱な木造家屋のためよく冷却されないところである。

アルゼンチンでは、他の中南諸国と同様、クーラーや冷房装置をとりつけている家庭は殆んどない。

これから判断すると如何にも日本よりおくれているように感じられるが、決してそうではない。

欧米白人諸国の消費は、まず住、食についやし、ついで衣につぎこむ。

即ち、設備の完備した家に住み家賃をととのえ、カロリー豊かな食事を食べ、ついで衣服をととのえる。

これで余裕ができたら、車を買ったり、カラーテレビにかえたりする。従ってクーラーなどは最後で、日本のように、水洗の設備のないバラックに住んでいてクーラーをつけ、家具の置場のない部屋にピアノを置き、車庫もないのに車を買うような考えはない。

また、家族も、一般に一人一人の寝室があり、日本のように一部屋に大勢寝るような家庭も少ない。アルゼンチンを例にとれば、各都市の下水設備や道路整備など、日本の比ではない。

自動車の通る街路にしても、どんなところにも歩道がある。

要するに日本の住居や都市開発は、欧米諸国に比して極めておくれているといえるのである。

街路の名と番地

東京でオリンピックが開催されていたころ、アルゼンチンのある雑誌に、アルゼンチン大使館へ行くのにタクシーをひろい街路の名と番地をいったところ全くわからず、数人の通行人や交番できいてやっとたどりついた、という記事があった。

欧米諸国家の場合、訪ねる家を捜すのは、日本と違って非常にわか

りやすい。

日本では、何丁目何番地と名前はついているが、その丁目番地が入り交っていて、地図をたよりにして訪ねても大変苦労する。ところが、欧米諸国では町名と道路名とが一致している。

そのうえ、番地も道路名の何番というようにまとめてある。

ブラジルでは、ある町の中心（大ていそこには教会と広場がある）を基点としてそこから道路と番地が始まる。

そして右側を奇数番、左側を偶数番に分けその基点から五〇米の地点の右側が四九番地、左側が五〇番地である。

だから一二五〇番地といえば基点から六二五米の地点であることがわかる。

そこで電車やバスに乗っていても下車地点が容易にわかる。

そこで間口の広い家には番地が沢山あるわけだが、門とか玄関、入口のどこか一つにその家の番地標がつけてある。

その番地標は、藍地に白抜きで、明瞭に算用数字で表示されている。

また、道路はその角に必らず表示されているから、日本のように迷うことはない。

30. どうぞ宣敷くお願いします

日本ではひんぱんに使われる「どうぞよろしくお願いします」という言葉など外国人に対してどういったらよいかとまどうことが多い。強いて合せれば初対面であれば、「ご機嫌いかがですか」で事足りる。このあとに更に「あなたにおめにかかって大変嬉しい」といえば充分である。このように国語はそれぞれ習慣になった言いまわしがある。これを慣用句といっているが会話を勉強するうえに一応言葉の習慣を心得ておかないととんだ失敗をする。日本語の挨拶ではこういうから外国語でも同じだろうと思って直訳してみても笑われるだけである。外国人を招待して「何にもございませんがどうぞ召し上って下さい」という日本語を外国語に直訳して言ったところ、相手の外国人はびっくりして不思議がっていたとの話もあるが、日本語の慣用句の直訳外国語は労多くして益のないものの一例であるが、このように日本語の慣用句には外国語では言わなくてすむことが沢山ある。

ヨーロッパの多くの国語の慣用句は前の紙面でものべたように、英語の慣用句とだいたいその表現方法がにているので、英語の言葉の習慣をそのまま外国語にあてはめればよいが、日本語の場合は複雑であり、又こういう慣用句はその瞬間にでてこなければならないので、外国人と交際する場合は充分に心得ておかねばならない。

日本人と欧米人とは風俗、習慣、物の考え方などが著しく異っているので、言葉の習慣や慣用句なども表現方法が異なってくるのは当然であろう。日本人は歴史的に外国人との接触や雑婚が少ないので、欧米人とは肉体的ばかりでなく精神的な面や思考方法においても著しく異なっており、日本人だけの閉鎖社会の中で同じ物の考え方や生活がくり返えされてきた。従って他人も自分と本質的には同じだという考え方が身についているので、相手にはっきりと自分の立場を主張したり説明したりする必要がないのであろう。だから「よろしくお願いします」という日本人独特のあいまいな表現でこと足りるのであろうが、欧米人には絶対に通じるものではなくかえって誤解を与えるものである。

このように日本人は欧米人と違ってはっきりした表現を用いず、あいまいな表現でまかり通っているようである。

手紙の表現も異る

日本文の手紙によくかかれる「残暑の候益々御健勝のことと存じます」などの冒頭文に相当するヨーロッパ語の適訳もない無理に直訳すると前にのべたように笑われるだけであり訳さない方がよい、このよ

うに冒頭文に限らず日本文の手紙の表現もヨーロッパの言葉のそれと可なり異なっているので充分に注意しなければならない。日本語の商業文を外国語に訳す場合、外国語の商業文の例文にあてはめ、日本文の直訳をさけて訳しているのも、この表現方法が異なっているからにほかならない。「拝啓」（謹しんで申し上げる）に相当するヨーロッパの言葉では、日本語に直訳すればどこの言葉でも一般に「親愛なる紳士（友人）又は淑女」であるし、「敬具」（謹しんで申す）に相当するのもどこの言葉でもだいたい「あなたの真実なるもの」となっている。

31. 汝自身を知れ

「汝自身を知れ」とはソクラテスの有名な言葉である。

即ち他人を知ってはじめて自分自身を知ることができるということである。

これと同じように、日本と日本人を知るには外国と外国人を知らねばならないということである。

日本は島国で他民族との接触や混合が少なかったため外国をあまりにも知らなすぎる面が多い。

チャーチルが大戦回顧録で「日本は外国を知らない。日本海軍は陸軍が外国を知らなすぎることからみれば、まだ外国を知っていた。したがって戦争には最初から反対であった」といっている。

また、マッカーサーがかつて「ドイツは世界を知ってやったが、日本は世界を知らないでやった。

ドイツが大人なら日本人はまだ十二才の少年である」といったことがあるが、日本が外国を知らないことは確かに明答のようだ。

戦前、日本は三大海軍国とか、五大国とか雖者が若い学生の頃さんざん吹込まれたが、今から思うと欧米ではそれ程とは思っていなかったようである。

ドイツの国際政治学者フランツ・フォン・リストがかつてその著書で「大国といっても第一級と第二級の区別がある。イギリス、ロシア、フランス、合衆国の如きは領土的にも海岸的にも人口的にも真にその利害は全世界におよんでいるところの第一級の大国である。これに反しドイツ、イタリア、日本にいたっては、その領土は大体において一大陸の範囲を超えず、海においては一つの大洋または海洋にのぞんでいるにすぎない。

ドイツはその実力においては十九世紀以来先進強国を凌駕するにいたり、世界強国の雖頭たらんとする勢を示したが、その形式においては、依然として大体において大陸国家であった。

ドイツはともかくとして、日本やイタリアは所謂第二流の大国の城を脱しなかったのである」と。

これは当時の日本に対する見方の一例であるが、現在、経済大国といっている日本にとっても考えさせられるものがある。相手を後進国呼ばわりして見下げたり、レジャーブームにのってドライブや海外旅行にあけくれている時でないことを各自が認識すべきである。

32. 外国人にない温情主義

外国商社の入社試験を受けた時、雖記試験と面接試験を採用係員の面前で行い、その場で採点し、面と向かって合否を決定されたことがある。日本では試験の結果は追って通知するのが普通である。つまり不合格ときまっていても、当人の面前で言っては気の毒なので、追って通知する習慣になっているのであろう。外国商社では甚しい場合には本人の面前で申請書や答案を破って不合格を言い渡すこともある。このようなドライな態度はこれらの場合に限らず日常の生活においても往々にみうけられる。

多国語が多少できるといって外国語で話されてよく解からない場合でも、いかにも解っているように笑って答える方が日本人にとっては相手に不快を与えないことかも知れない。しかし白人国ではこれと逆で、相手のいうことが少しでも解らないと何回でも「貴方のいうことがよくわからない」とはっきり言う。

東京でオリンピックが開催された時、日本の女性に対し外国の選手や付添人などとはあまり深入った交際をさけるよう警告したことがある。これはつまりイエス、ノーをはっきり言えない日本人の慣習を欧米人が知らないので誤解を招きやすいことからであろう。

商売上の話しとなると更にひどい。相手の目をみつめたままで笑顔など全くなくはっきりいうので日本人からみれば喧嘩でもしているようである。

日本人の商社マンが、現地人の雇員を使うのに、年上の者に対してはもち論、年下の者に対してまでも、ミスターやミスなどの敬称をつけるのを奇妙に感じている。それは欧米人間では雇主は雇人に対して呼ぶときは絶対に「さん」や「君」のような敬称どころか、名前をちぢめて呼びすてにする。雇人が日本人だとクリスチャンネームをつけさせ呼びすてにしているようである。年上であろうと、よそのものであろうと女性であろうと遠慮は全くない。この点日本の慣習とは反対であるが、どちらがよいか悪いかは別として現地で現地人を使う場合は充分にこのことをわきまえておくべきであろう。

前の項目でもたびたびのべたように、日本人は国際性に乏しく社交性にかけるところがあり、また、言語習慣気質思考、生活態度などにおいて現地人と甚だ異なっているので、現地人としっくりいかず誤解や意見の対立から紛争を生じて失敗するか喧嘩別れに終る場合が多い。また、日本人は白人に対して甚だ弱く、白人に乗ぜられ押し切られて大きな損失をかけられ喰物にされる場合が少くない。日本式の温情主義や義理人情は白人国では通用せず、かえって組み易しとしてナメられる危険があるので充分に留意すべきではなかろうか」。

33. 内側と外側のズレ

佐藤前首相にノーベル平和賞が授与されることになった。その授与の理由は、核開発の能力をもちながら非核政策を貫いてきた日本に高い評価が与えられたからであった。日本国内からみれば佐藤前首相の外交面の治績は、沖縄返還と日韓の国交正常化ぐらいのことしか頭に浮ばない。すなわち内側の接着した距離から見る目と、遠く離れて外側からながめる目との間に大きなズレがあり、自分の国のことは、自分が一番よく知っているつもりでも、案外気づかない盲点があり、外国人は違った尺度で評価しているということである。早い話、経済大国日本と思っていても欧米諸国では、日本で自称されているほど経済大国とは思われていない。

事実、住居や食生活などの低さは、はずかしいながら欧米の水準には遥かに遠い。また、海外で日本人をエコノミックアニマルといわれていることは日本人の誰もが知っているが、海外では一部のものがいうだけで大多数はそのように思っていないということである。

これらのズレを知るにはたえず日本に関する海外の論評や記事などに留意すると共に海外の新聞や印刷物をみたりして、国際的知識を涵養することが必要であろう。

役立たない語学教育

日本の語学教育は一口にいって上級学校の受験のためのものが多く、その試験を通る目的で必要にせまられて発達したように思われる。

とりつかれるものは「文法病」で、根気と努力が逃げるので中絶して長つづきしない。

語学はその言葉を育てている国々の地理、歴史、経済や人情、風俗

習慣が色々な観点から学ばなくてはならないし、その時代を深く呼吸していなければならない。

よりよい海外の新聞なり刊行物によって遅れた頭を時代と共に並行させて勉強してほしいし、日本を尚うの新聞という「大きな眼」を通じて見直すべきであろう。

海外文通

語学は前にのべたように何か目的がなければ学ぶ気にもならず永続きしないもので、せっかくある程度まで覚えても使わずにいると忘れてしまうものである。この目的の一つに海外との文通をおすすめしたい。

もち論文通も永続性がなければならず、またこの永続性をもたせるためには相手の選び方、教養、深い趣味の一致などが大切であるが、文通は第一に語学研究に意欲をもたせる。

第二に、相手国の新聞や刊行物などをよむことにより、海外の事情を知り得るし、また、日本の正しい姿を海外の人へ紹介できるということである。

国際友情連盟の創立者エドナ・アクドナウがいった、「他国の熱心な人々からの友情あふれる便りは少なくとも二つのことをなすものである、それは受けとる人を教育し、また、友人の目とペンを通さなければ決して見ることのできない国へ短い旅行をさせ楽しませてくれるものである」と。

34. 国際性に乏しい日本

（日本のイメージは中国の右端とスキヤキソング）

ヨーロッパで有名なものは国際的に知られている。

しかし、日本で有名なものは国際的にはほとんど知られていない。これは欧米人の対日関心が極めて乏しいことと、世界が欧米白人社会でしめられていることにほかならない。

日本でつくられている世界地図は、日本と太平洋を中心につくられているが、欧米諸国のつくった世界地図は、大西洋を中心にヨーロッパ大陸とアメリカ大陸が真中においてつくられている。

この場合、日本列島は右端にきて、太平洋は左右に分断されているので、欧米人の日本に関するイメージは中国の右端という観念しかない。

アルゼンチンの新聞をみても海外記事の第一は、ヨーロッパとくに南欧、ついでアメリカ、ラテン・アメリカ、中近東、アフリカ、アジア、最後に極東の順で、日本に関する記事は、欧米にくらべれば極めて少ない。このことはアルゼンチンのみでなく欧米諸国の新聞も皆これに類似している。

これらのことから、例えば、芸能人をみてもプレスリーやフランクシナトラやビートルズなど、一国にとどまらず国際的に知られわたっていて、欧米の名地で上演されており、日本でも上演されたこともある。

しかし、日本人では誰もが知っているもの、例えば、美空ひばりや郷ひろみなど、日本から一歩外へ出たら殆んど知っているものはない。ましてや欧米諸国においてはなおさらである。リオで遊覧バスに乗ったときのことである。そこに見合せた乗客には、アメリカ人、イタリア人、ドイツ人、アルゼンチン人と日本人がいた。

ガイドが客の退屈しのぎに、そこに見合せた人の各国自慢の民謡を合唱で歌いはじめた。

アメリカの民謡には、オースザンナ、ついでイタリアは、オーソレミオ、ドイツはローレライ、アルゼンチンはカミニートと乗客全員がほとんど原語ではっきりと歌えるのには全く驚いたものである。

最後に、ジャポネースの民謡とガイドがいったら誰も知らず、しば

らくしてスキヤキソングの旋律が乱唄で歌われ笑われたことがあった。

これらは、日本のものが国際的に全く知られていないことの一例にすぎないが、これからでも判断できるように、日本人は欧米の知識は極めて広く知っているのと反対に、欧米人は日本のことについて全く知らないことを意味している。

欧米人との交際に極度の遠慮は禁物

日本式の遠慮は、時と場合によって考えないと、とんでもないことになる。

相手が飲まないからといって、自分が飲みたいものを遠慮する程度なら、自分が損をするだけで、相手には良い感じも悪い感じも与えないが、相手の親切を極度に遠慮してはならない。

メキシコから日本へ向って発つときであった。

現地人の友人が車でホテルに迎えて飛行場まで見送りするとのことであったが、飛行機の発つのが朝五時になったので、悪いから断ったものの是非お見送りするというので再び断ったら相手をひどく怒らせてしまい、困ったことがあった。

日本式に考えれば見送ってもらいたいものの、一度遠慮して断った方が好感がもてるが、欧米白人国では全く反対である。

遠慮せずに「有難う」といって気やすく好意にあまえた方がベターである。

35. 先駆者たちの努力を無にするな

最近テルアビブ空港事件をはじめ赤軍派によるシンガポールやハーグなどで行われた乗っ取り事件、さらに、ストックホルムにおける日本人の強盗および赤軍逮捕事件など日本人の品位を著しく傷ける事件が続発していることは真に遺憾である。前の項目でものべたように、欧米人の日本および日本人に関する認識は極めて乏しいので、ちょっとしたことが外国人に非常にデリケートな印象を与える。海外に渡航するものは日本人の誇りを傷つけないよう充分に気をつけねばならない。

ドイツやイタリア人などがアメリカなどで犯罪を犯しても、同じヨーロッパ人であり、キリスト教国民でもあるのでそれ程民族的な恥をさらされることはないが、日本人の場合は欧米人の心境に与える影響は頗る大きい。

明治三十八年九月、ポーツマス条約の結果を不満として、東京で焼き打ち事件があり、ちょうどその夜アメリカのハリマン一行が大蔵大臣の招きで晩さん会におもむく途中、暴民が彼の馬車に石を投げ御供の医者が負傷するという騒ぎがあった。この知らせが米国につたわるとハリマン一行の一員が傷つけられというので早速「日本人は文明国民と思っていたが、やはり東洋人だ」という悪評が米国民にひろがったことがある。

昔、欧米人が世界の植民地を支配していた頃、領事裁判制度を有していた。これは外国人に関する裁判をその本国の領事（またはこれに代るもの）が行う制度である。日本の領事裁判制度が完全に廃止されたのは二十世紀当初であった。しかし、キリスト教国のみを文明国としていた当時において、この制度を廃止にするまでには、なみなみならぬ苦心と努力があったのである。

ロシアがかって旅順大連を租借していた頃、英国は極度における均勢を維持する必要上から威海衛を租借した。威海衛は当時、日清戦役の結果として日本が占領していたので、英国の申し出をのみ、日本は威海衛を英国に引き渡すことになった。それを受け取る英国の議員たちは大いに驚いた、兵営でもどこでも実に掃除がよくいきとどいて、釘一つぬけておらず今日これを引き渡せば即英国の軍隊が代って入ることができる。日本の軍隊のきわめて几帳面で規則が厳格で予想以上

に感動されたことがあった。

アルゼンチンは今日、親日的な国である。しかし、これは在留邦人の今迄の苦心と努力の賜なのである。日本人には犯罪は皆無であったどころか人命救助などアルゼンチン社会への貢献は大きかった。したがって日本人に対する信用は厚い。列車やバスで車掌が検札にきても日本人にはキセルはないものとして除外されることもあった。日本人であれば送済は確実であるので銀行も日本人には安心して融資した。僻地へ文書などを託送するには日本人に限るとされている。商店もところによっては日本人に対しては前金をとらないこともあるなど日本人に対する信頼は大きい。これは先駆者達が努力して築きあげた結果である。アルゼンチン国に限らず欧米諸国においても日本人に対しては好評であった。しかし残念なことに最近の若い青年男女のハレンチ極まる行動に対し、「日本人はやはり東洋人だ」と昔にもどって悪評され、先駆者たちの努力を台なしにしているのではなかろうか。

36、女性のマナー

日本では、客を食事に招待したとき、夫人達は一般にしゃべらず、人前で黙っている方が、おしとやかで、美徳とさえ思われているようです。

しかし、白人社会では、これと正反対で客を食事に招待したときは、話題の中心が女性の方にあるのです。

つまり、夫人達がしゃべって亭主達は皿をとったり、ソースをとってやったり、ビーノやビールの栓をあけたり注いだりして、おしゃべりは女性にまかせているのです。

白人社会では、酒を食物消化のアペルチーフとして飲むので、女性も男性と同様に楽しく一時を過ごすのが一般的な習慣となっています。ジュースやコーラで黙って男の客や主人の酒の相手をするという日本とは、この点で異なっていると思います。

女性の話題は、日本の場合、まず人の噂や悪口から始まる（？）が、白人社会では、指輪の話から、服の流行、旅行の話、体験談など、その場の雰囲気に見合った話が飛び出すので一層話はつきない。

「日本人は、あまりに言わなすぎるので、いろいろの点で損をする」とカナダのマンパワーの面接官からいわれたことがあるが、確かにその通りであると思われます。

とくに女性にいたってはその傾向が強いようです。

ある現地人の家庭に夕食に招待されたとき、妻が一言もしゃべらず、私が一人でしゃべっていたら、相手に非常に奇妙に思われたことがありました。

「日本の女性は日本語しか話せず、スペイン語を全く知らない。何か質問しても、すぐ、主人が答えるといって、用件が全くはかどらない。そうかといって、日本女性が二人以上集まると、ペラペラと日本語でしゃべりまくって全く不愉解だ」ということをアルゼンチンの現地人女性からよく言われたものです。

白人社会では、人の面前で当該国の言葉以外の言葉で第三者と話すときは、必らず「失礼して日本語で話します」と一言ことわるのが礼儀となっています。

海外にでて、外国語が必要なのは男性だけでなく、女性の方も必要なのであることを充分心得てもらいたいと思います。

しかし、日本の夫人達は、この重要性を認識していないように見受けられますので夫人達こそ外国語をマスターし、さらに白人社会の応対法を研究し、積極的にその中へとけこんでいく努力が必要なことと思われます。

日本では、他人に自分の妻を愚妻といったり、自分の子を豚児といったりするが、愚妻や豚児の適訳は欧米語には見当らない。

白人社会では、他人には自分の妻や子供を極端にほめ、誇をもって

いうのが習慣となっていますので、まず、こういうことから徐々に国際性を養って行くことが、大切であろうかと思います。

「ではないか」に対する答え方

日本語では、「あなたは中国人じゃないですか」とか「スペイン語を話しませんか」とかたずねられたとき、答が否定の場合に「はい」で答えがちですが、英語やスペイン語など印欧語の場合は、質問文にNOが入っていようといまいと、そんなことに関係なく、肯定の答なら、YesまたはSiと受け、否定なら、必らずNOで受けなければならないのです。

しかし、これは日本人にとって、よっぽど慣れないと間違いやすいところです。

いつか海外で、税関の係官から、「もっていないか」とたずねられたのに、うっかり日本流にYesと答えたため「ここに出せ」といわれて急にNO、NOといって係官を面喰わせていた人を見たことがあります。

また、日本のある女性がNOと言わなかったため、とりかえしのつかない失敗を招いたという話をよく聞きますが、こんなことのないように、とくに海外就職する方は、注意しなければならないことです。

37. 年少者教育と人種

アメリカで発行されている、年少者向けスペイン語教科書で、色の形容詞についてのレッスンのところに、黒人とインディアンと中国人の三人種を、それぞれ黒色、褐色、黄色の色の区別として引例している。

その頁に、あなたは何色ですか、私は白色です。私はヨーロッパ人です。ヨーロッパ人とアメリカ人は白色人種です。

われわれはどの人種ですか。われわれは、コーカサス人種です、と書いてある。

これをみてもわかるように、年少者にすでに白人の優越感が教えこまれているようである。

しかし、ラテン・アメリカやロシアでは、あまりこのような白人至上主義の引例は見当らないようである。

白人とは、主として、イギリス人、アメリカ人、ドイツ人、オランダ人、北欧系の民族などからなるチュートン族、ロシア人、ポーランド人、ユーゴスラビア人などからなるスラブおよび、フランス人、スペイン人、イタリア人、ポルトガル人、ルーマニア人などからなるラテン族、この三大民族からなっている。

だが、この三大白色人種のなかで、ラテン族およびスラブ族は比較的人種的偏見のない人種であることを知っておかなければならない。

これに対し、チュートン族は、人種的偏見の強い民族なのである。

このことは、チュートン系のアメリカ、カナダ、オーストラリアなどと、ラテン系の中南米諸国などと比較すればすぐ合点がいくはずである。

第二次大戦中、アメリカの日系人は強制的に収容所に入れられたが、同じ敵国人のドイツ人やイタリア人はこのようなことはなかった。

また、オーストラリアは白豪といわれ、有色人種への移住は未だに制限されている。これに反してラテン・アメリカ諸国は、インディアンやメスチーソが大統領や高官の地位についている。

また、ソビエット連邦においては、東洋系民族が雑居し人種的差別は全く存在しないようである。

しかし、これら白色人種の差別観のなぞは、やはり歴史的背景があるものと思われ、長期的視野にもとずき解決されるものであろう。

チュートン族に比して、比較的人種的偏見のないスラブ族およびラテン族について簡単にのべてみると、

まず、スラブ族は一口にいって、昔、先住のフィン族（東洋人種）と雑居して協力し、外敵に備えていた。これによって都市においては

種族の差異よりも地縁的関係の異同の方が重んぜられていたのである。

また、ラテン族については、ローマ帝国にさかのぼって考えるに、ローマ帝国の皇帝や官吏は専制的であっても、その皇帝や官吏に元の被征服民もまたなりえたのであり、貧富の対立はあっても、それが種族的搾取ではなく、ローマ帝国の運命を担ったものは、元のローマ人やイタリア人よりも却って元の被征服民であった。

このようなことは、イギリス帝国のそれと比較すると根本的に異なっていることを知らなければならない。以上のことから、ラテン・アメリカ諸国民が人種差別のない白人であり、日本人にとって親しみやすく、とっつきやすい白人であり、劣等感をいだくことなく、白人社会にとけこんでいかねばならないと思われるのである。

海外での食事マナー

あるアメリカ人が、そば屋さんで天ぷらそばを食べていた。

よく注意してみると、音を全くたてず、実に上手に食べているのには驚いた。

日本人からみれば、そばは音をたてて食べるものという習慣があり、音をたてずに食べるとそのおいしさが半減してしまい味気ないものとなろう。

お客さんで満員のときなどは客がそばをススル音で、テレビの声も聞きとれないほどの雰囲気によく遭遇することがある。一方、欧米人は、スープは音をたてて飲むのをエチケットに反するものとして非常に嫌っている。

ブエノスアイレスのあるレストランで、日本人移住者が音をたててスープを飲み、しかもフォークを右手に、ナイフを左手にもって（左ききは、この限りでない）ガチャガチャしながら、食べているのを周囲の客は勿論ボーイまで笑って見ていたのを思い出す。

欧米人には、日本人は野蛮人だというものも多いが、これはつまり白人のエチケットやマナーを知らないからであろう。

ここで食事のエチケットの話をもう一つ知ってもらおう。

欧米人は、食事の前には必ずトイレに行く。それから食事が終るまでは、絶対に席を離れてトイレに行ってはならないということである。

しかし、日本人は食前にトイレに行くものに加え、酒が入ると食事中であっても習慣がそうさせるのか、二回、三回とトイレに行くものが多く見受けられるが、これも欧米人のエチケットに反するのである。

38、海外での飲酒マナー

アルゼンチンで現地人を食事に招待したときのことである。

日本流にアルコールをすすめてひどく怒らせてしまった。

日本では酒はすすめることが礼儀であり、たとえ「ノー」といわれても更にいいじゃないですかとすすめて注ぐのがどうやら一般的な礼儀のようである。

また、飲みたくもないのに無理に相手のご機嫌を伺いながら、調子を合せる者も沢山いる。相手が飲まないと自分も遠慮して我慢する場合も多いようだ。

酒の酔がまわってくると、手をたたいて歌を唄いだし、それも酔が一段とまわるにつれて下品になるので、女性の退場となってしまうのが普通のようだ。

しかし、白人社会では、これとは全く反対である。

酒は飲みたければ飲みたいだけ自分で注いで飲む、飲みたくない者に酒をすすめると、日本のそれよりも相手を怒らせてしまい、機嫌をそこなうことになる。よく考えてみると、日本人の飲酒のマナーよりも白人のそれが、ずっと遙かに上であろうと思うのである。

白人には二日酔で悩む人はあまりいないし、飲酒運転で事故を起す者も殆んどいない。また酒による喧嘩も事故死も少ないし、騒いで夜

道を歩く者も殆んどいない。

クリスマスイブの夜、あるレストランで酒を飲んでいたら、一人の現地人が飲み過ぎたのか居眠りしていた。するとボーイが「ここは寝るところではない」といって外へつまみ出したのを覚えている。飲んで歌を唄う席上も殆んど見られない。歌はカンティーナ（歌声喫茶）で大いに唄うのである。

以上のことからも、酒をすすめるという行為から派生して起る種々な悪影響がいかに我々の身近に多いことかを気づかうのである。二日酔も飲酒運転による事故なども、自分の適量という尺度に合わせて飲むのならあとで反省するようなことも起らぬはずである。

白人の飲酒は日本人のそれと異なり、食事のアペリチフとして飲むのがその用法である。食事を楽しく、長く愉快にし、食物の消化を助けるものと考えを改きかえては如何か。

食べずに酒を沢山飲む日本人は非常に多いが、白人は食べて飲む習慣があるので、二日酔も少なく健康を害することも少ない。つまり、日本人の飲酒マナーは白人社会では通用しないということである。

日本では「俺の盃が受け取れないのか」とか、盃をかわす習慣がごく一般的であるが、白人社会ではこのようなことをやらかしたなら、大変なことになるので、特に海外移住を希望している方はこのマナーを充分理解しておいてほしい。

即ち、白人社会へとび込んでいかなければならない時代となった。それには白人の風俗習慣生活態度などを知る必要があり、良い面は日本人社会にも徐々に取り入れていくこともわすれてはならない。

酒は自分の適量でやめ、自分でコントロール出来るよう、日ごろから心がけていきたいものである。

二つの顔と異質社会

★成功も生活態度から

アルゼンチンで現地人に夕食に招待されたときである。

その家の七才になる娘が、私の顔を絵に書いてくれたが、なんとそれが歯をむきだしに書いているのではないか、よく西洋の漫画家が日本人の顔を書くのに歯をむきだしにして書いている絵の多いことに気づく。

西洋人（白人）にとって日本人（黄色人）の歯がもっとも興味あるものなのであろう。

われわれの側から白人をよく注意してみると、白人の上歯は内側にむいていて横からみると額と口を直線で結べば同じ高さで鼻だけが高くでていることに気づく。しかし、日本人の顔はこのように線を引くと、額よりも口の方がつきでており、人によっては鼻の高さと口のでっぱりが同じくらいの人もある。

自分の横顔を鏡に写してみればすぐわかる。つまり白人の上歯は内側に傾いているが、日本人の上歯は外側に傾いているので、しゃべったり笑ったりすると、歯がむきだしてみえるというわけだ。

白人と話をしていると、白人はほとんど歯をみせない。白人の歌手が唄うときは、ほんの二、三ミリしか歯をみせていないことに気がつく。

最近、頭の毛を赤く染め白人気取りをしている女性も多いが、これも横からみれば一目瞭然、笑えばなおさらはっきり区別がつく。

★異なる義理・人情

まあこれは一つの例だが、日本人と白人とは肉体的にみて、一つ一つが可成り異なっていると同時に、言語、風俗、習慣、気質、思考、生活態度などにおいても、欧米人（白人）と極めて異なっている。

日本人にとっては徳に値するものが、欧米人にとっては無作法と思われることもあるし、また、日本人の義理、人情がかえって欧米人にスキを与え危険とされることもある。

世界の大部分は、日本や中国、タイ国などを除けば、欧米人、即ち白人によって支配されてきたのである。アジア、アフリカ、オセアニア、アメリカ大陸はこれら白人、つまりチュートン族、スラブ族、ラテン族の三大白色人種で支配されてきたのである。したがって、われわれ日本人が海外へ勇躍発展するためには、まず第一に白人の言語、風俗、習慣、思考などを充分に知っておかねばならないのである。日本人が国際性に乏しく社交性に欠けているといわれるのは、これらのことを充分に知らないからである。

★白人の日本観はゲイシャ

欧米人のなかには、日本人の言語、風俗、習慣などを知っているものはほとんどいないし、日本人と交際する場合でも、欧米人のベースで考え、行動していることを充分にのみ込んでいなければならない。白人の日本観などは、まだまだフジヤマゲイシャの観念しかないものが多く、日本人に対する認識は極めて乏しいのである。

海外移住をみても、現地引受先の大部分は、日系人農家、日系企業に限られており、また日本の進出企業が現地企業との合弁事業において、欧米人のそれのようにうまくいかず発展性に乏しいのは、結局、白人との社交性に欠けているからに外ならない。

★交際の下手な日本人

ある日本人が、アメリカ人を夕食に招待したものの、気をつかいすぎて、自分のつくった料理もろくに手をつけず、客人が帰ったら、やれやれとヒヤ汗をふいて食べなおしをしたという話もあり、白人との交際を日本人同志の交際と同様に出来る人は、数える程としかいない。

39. 外人にいだく劣等感

日本では、白人をみると、一般に外人とか毛唐とかいっている。中国人やその他の東洋人をみても、日本人と区別がつかないせいか外人というものはあまりいないようである。要するに、外人とは白人をさしていうのが、習慣となっているようである。

アルゼンチンには、日系人が約二万七千人いるが、面白いことに彼らは、現地人（白人）を毛唐とか毛唐さんと呼んでいるのである。

しかし、よく考えてみると、日本人の方が外人であり、また毛唐なのであるが、白人をみると外国においても日本での習慣で、毛唐という言葉をそのまま使っているのは、いささか奇妙である。

終戦直後、日本では白人をみると、皆んなアメリカ人と呼んでいたことを思い出す。

外語のスペイン語の講師をしていたあるスペイン人は、当時国電に乗る時、いつも連合軍専用車に便乗して、何らとがめを受けたことはない、といっていた。むしろ、アメリカ日系二世兵士の方が、私服を着たときに疑われることが、多かったということがある。

また、アルゼンチンに移住した青年に結婚相手を選ぶ場合、日本語の話せる白人女性と、日本語の話せる二世女性と、どちらを選ぶかといったら、後者とする者が圧倒的に多かった。

これはつまり、白人はとっつきにくく、交際しにくいからであろう。丁度、海外で中国人と中国語が全く解らなくても交際しやすいのと同様である。

こうしたことは、かえって白人に対する劣等感をまねくものであり、理解し合うという積極性に欠けている証拠であろうと思われる。

一体、白人とはどんな人種に入るのだろうか。白人には、欧米人、即ち、チュートン族、スラブ族、ラテン族の他に、中近東、北アフリカなどの人種という具合に、その範囲は広い。

これらは、日本人からみれば白人と区別のできない人種であろうし、沢山いることを知っておかねばならない。

欧米では、これを総称して白人のことを、コーカサス人種と呼んでいる。要するに印欧語系、チュルク系、セム系の言語を有する人種を指しているのであろう。となると、アラビヤ人もトルコ人もユダヤ人も日本にくれば白人と思われるのである。

日本は白人にとって天国だということをよくきくが、これは、日本人は白人に対して、非常に弱く、卑屈な態度をとっているからではなかろうか。

このことは、日本人にのみ限ったことではない。例えば、同じ東洋人のタイ国では、日本人と欧米人と同じ企業進出でありながら、欧米人に対しては全く反感がなく、日本人に反感が高まるのは、結局、東洋人の白人に対する劣等感によるところが強いからであろう。

ブドウ酒の飲み方

最近、日本人にも海外生活をしてきたものが多くなったせいか、葡萄酒を飲む者が日増にふえてきたように思われる。

しかし、海外の葡萄酒に比して高価な日本の葡萄酒を、日本式に飲むなら、葡萄酒の美味も消え、不健康であると同時に不経済このうえないものとなろう。日本では、アルコール類といえば、酒とビールとウィスキーぐらいなもので種類は少ない。

最近では、家庭でカクテルを作り、タシナムという傾向にあるようですが、そのもととなるアルコール類が高価で、安サラリーマンではとても飲めないのが一般的なようである。

しかし、南米では、アルコールの種類は極めて多く、かつまた、日本と比してその値段も安価である。

例えば、アルゼンチンでは、葡萄酒だけでも五十種類以上もあり、色で大別すると三種類ぐらいだが、それぞれ、食物に合わせて飲むもので、場合によっては、コップもその葡萄酒の種類に合わせて、かえることができる。

客を夕食に招待する場合、普通の家庭では、まず食前に、ソファーでアペルチーフとしてチンザーノ、またはガンシャを飲む。強い人はストレートで、弱い人は、炭酸水で割り、カラ口の人にはこれにフェルネットを混ぜて甘さを消して飲む。

これが終ると食卓につき、料理に合わせながら葡萄酒を飲み食事する。食事が終ると、再びソファーにもどって、酒の飲みたらない人は、ウィスキーなどを飲みながら雑談する。

アルコール類のコースは長く、バリエーションに富んでいる。

日本人だったら、チャンポンで二日酔をしてしまうのではないかと思う人もいるかも知れないが、食物とアルコールが適度に調和していくので、このような心配はない。

この紙面でも紹介したように、欧米人の飲酒は食事の消化を助長するためのアペルチーフとして飲むもので、ヤケ酒や、バカ騒ぎのために飲むことは、あまりない。アルコール類は男性に限らず女性にも同様に飲まれるもので、日本人のように女性はジュースで男性の酒の付合いをするというさびしさは全くない。

白人社会では、このようなことはなく、女性が話の中心になる。話題は、レディーファーストで、日本のように女性がだまっているのと正反対であることを忘れてはならない。

また、話題も日本人のように人の噂とか悪口は言わず、つねにユーモアに富んだ楽しい談話でなければならない。

40. スペイン語の発音アレコレ

スペイン語は、日本人にとって発音しやすい言葉である。

スペイン語使用国の人々が、アメリカ人の話すスペイン語より、日

本人の話すスペイン語の方がわかりやすいといったことがあります。

わずらわしさがないスペイン語

スペイン語の文体が、日本語のように単語が子音、母音と続いており、また、アクセントの位置も一定しているため、英語のように単語の発音が、まちまちでいちいち辞書に頼らねばならないというわずらわしさがない。例えば、英語使用国のレストランへ行って、オレンヂジュース（Orange Juice）を注文するのに、一言で通じたら可成り英語がうまい方である。

英語の発音をカタカナで書いて、それをそのまま英語国へ行って発音しても殆んど通じないのが通例です。

したがって、英語の発音を教えるにはカナを用いず、一般に万国音標文字で教えられている。

これに比してスペイン語は、カタカナで書いてから、そのまま発音しても、殆んど通じる場合が多い。スペイン語に限らずイタリア語やポルトガル語についてもいえますが、このことは要するに日本語にアクセントをつけて発音すればそれでよいということなのです。

しかし、スペイン語もイタリア語も欧米語系の言葉である以上、日本語のシラブラ（音節）に類似しているとはいえ、やはりいろいろの点で英語に近く日本語とは根本的に異なっていることを知っておかなければならないのです。

スペイン語を話すときの注意

われわれ日本人が、スペイン語を話す場合、とくに注意しなければならないことを四つある。それはR(rr)L，および二重子音と最後にくるSの発音である。

Rが単語の初めにきた場合、またはrrが単語の中にある場合の発音は「一顫動」の発音といわれ、舌の尖端が少なくとも二、三顫動して歯茎との間にはためきを生ずる点です。

アルゼンチンで小ビンゼールを Porroncito というが、これをレストランでrrを一顫動させないで日本語式に、ポロンシートといったら全く通じなかったことがありました。

思いきって無理に舌を振わせないと相手に通じないのです。

この音は、英語にはなく、イタリア語やポルトガル語にもありますが、上品な日本人にとって発音しにくい綴りであるようです。

南ブラジルでは、このrrをさらに強く振わせるので喉にひっかかって、日本語の「フ」「ク」に近くきこえます。

例えば、Rio がヒオときこえるように。

つぎに、Lの発音のできないのは、東洋人のなかでも日本人だけだといわれています。

Lは英語と同音であり、舌の尖端の上顎の門歯の歯茎にぴったりとくっつけておき、舌と白歯との隙間から気息を送りだすのです。

これを日本式の「ラ」で発音すると下品となるばかりでなく、相手に通じなくなる場合が多く出てくるのです。

アルゼンチンで、電話のモシモシを Hola というが、電話の相手が日本人であるかどうかLの音ですぐわかります。

アルゼンチンで Habla を日本語式にアブラといって通じないことはなかったけれども、笑われたことがありました。

二重子音は日本語にはない

つぎに、二重子音ですが、これは印欧語系に多く、日本語にはない音です。例えばPlataをPulataと発音したりLibroをLiburo と発音したりすると全く通じなくなります。

二重子音は一つの音でありますので、これを日本式に二つに分けてはならない。

分けて発音すると全く通じなくなるのです。

ブエノスアイレス市街に Piedra という所があります。
これを Piedora といってバス内で切符を買ったところ全く通じなかったこともあった。
最後に、単語の終りの「S」です。これはかすかに「ス」が残る程度で発音するとよく、これを日本語式に「Su」と読むと絶対に通じなくなります。
例えば、Seis を「Seisu」のように発音してはならないのです。
以上、四つの点に注意し、カタカナにアクセントをつけて読むように話せばスペイン語は、案外簡単に身につくものです。
語学の上達は、毎日コツコツとやる習慣を身につけることです。ちょっとした小冊子をポケットに入れて歩き、何時でも気安しく見るのも一方法です。